三重県埋蔵文化財調査報告　73

上野市下郡

下郡遺跡発掘調査報告

－第７次調査－

1986.3

三重県教育委員会

序

青山高原に端を発し、上野盆地を南北に貫いて北流する木津川支流長田川は、古くからの交通手段のひとつであるとともに、その蛇行によって引き起こされる流域集落への水害の元凶でもありました。

そのためこの下郡地区では昭和46年から木津川の河川改修工事が始められ、昭和53年から記録保存のための緊急発掘調査が９年間という長期にわたって計画的に行われてきました。ここに報告する調査はその最終年度にあたるものであり、かつ長期間にわたった下郡遺跡の発掘調査に一応の終止符を打つものであります。

この下郡遺跡は大規模な複合遺跡であり、特に今回の調査で明らかになった中世城館の存在は、従来推定地としてとらえられていた館跡と考えられるところから、その館の歴史的具体像に一歩近づく貴重な資料を提供したことと思います。

記録保存の名のもとに多数の遺跡が消滅していったわけでありますが、この地の歴史を考える上でも周辺の地下に眠る文化遺産は、今後も永く後世に伝えていくことが現在の私たちに課せられた使命であると考えます。

発掘調査に際して御協力をいただいた関係諸機関をはじめ、地元各位に感謝の意を表するとともに、今後とも埋蔵文化財の保護に関して一層の御理解と御協力を願うものであります。

1986年３月

三重県教育委員会教育長

横 田 猛 雄

例　　言

１．本書は、三重県教育委員会が、県土木部から執行委任を受けて実施した、一級河川木津川改修事業に伴う上野市下郡に所在する下郡遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

２．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会事務局文化課

主事：倉田　守

同　：中川善夫

調査協力　三重県土木部河川課

三重県上野土木事務所木津川改修工事事務所

上野市教育委員会

上野市下郡市民館

地元下郡地区各位

３．発掘調査後の整理及び報告書作成は、倉田が行った。

４．本書における方位は、すべて磁北を用いた。

４．下郡遺跡の遺跡略記号は、「４ＪＳＧ」とした。

5. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……1

Ⅲ　遺　　構……5

　１．Ａ地区の遺構……5

　２．Ｂ地区の遺構……5

Ⅳ　遺　　物……9

　１．包含層出土遺物（古墳時代）……9

　２．遺構出土遺物（室町時代以降）……11

Ⅴ　結　　語……18

　１．遺構について……18

　２．遺物について……19

　３．館主について……20

挿　　図

第１図　遺跡位置図……2
第２図　遺跡地形図……3
第３図　発掘区位置図……4
第４図　Ａ地区遺構平面図……5
第５図　Ｂ地区遺構平面図……6
第６図　ＳＤ１断面図……7
第７図　ＳＥ６実測図……9
第８図　出土遺物実測図……11
第９図　出土遺物実測図……12
第10図　出土遺物実測図……14
第11図　出土遺物実測図……15
第12図　出土遺物実測図……17
第13図　出土遺物実測図……18
第14図　出土遺物実測図……19
第15図　遺構配置図……21

表

第１表　遺跡地名表……3

写　真　図　版

航空写真……ＰＬ１
調査前近景（北から）……ＰＬ１
調査風景（西から）……ＰＬ２
Ｂ地区近景（北から）……ＰＬ２
Ｂ－３地区近景（北から）……ＰＬ３
ＳＥ５（北東から）……ＰＬ３
ＳＥ６（東から）……ＰＬ４
ＳＥ６断面（南から）……ＰＬ４
出土遺物……ＰＬ５～ＰＬ10

Ⅰ　前　　言

一級河川木津川の洪水に対する左岸の拡幅及びこれに伴う住民の集団移転事業は、昭和46年頃から上野市下郡地区で計画されてきた。この計画は木津川本川の拡幅、支流矢田川の改修、集団移転地の造成とともに上野市による圃場整備事業も含むものであり、木津川本川部分以外の事業計画地において昭和52年12月に上野市教育委員会によって試掘調査が行われ、その結果をふまえて翌53年２月から上野市下郡遺跡調査会により発掘調査が実施された。この調査によって古墳時代から室町時代に至る遺構が検出され、縄文時代以降の複合遺跡とされる下郡遺跡の一端を裏付けた。[①]

一方、木津川本川部分については、三重県教育委員会によって昭和53年10月から11月にかけて試掘調査が行われ（第１次調査）[②]、さらに昭和55年１月にも前回の試掘調査を補うものとして２度目の試掘調査が実施された（第２次調査）[③]。

２度の試掘調査の結果、２地区が面的な発掘調査を行う必要があると判断され、昭和55年10月から12月にかけて第３次調査が、続いて昭和56年10月から翌57年２月にかけて第４次調査が実施された。その結果、中世後期から近世にかけての多数の遺構・遺物が検出され、さらには試掘調査では想定できなかった中世城館跡と思われる堀の一部も検出された。[④]続いて昭和57年度と昭和58年度には第４次調査区の南側を対象とし、中世後期から近世にかけての遺構を確認するとともに下層遺構として弥生時代及び古墳時代の遺構を検出した（第５次調査及び第６次調査）。

ここで報告する第７次調査は、木津川本川部分の改修工事に伴う下郡地区での最終調査である（第７次調査）。調査区は、建物・道路などこれまでの調査では行えなかった部分が主に対象となった。既調査区の間隙を埋めながら北からＡ地区（従来の調査では「観音堂」地区と呼ぶ）とＢ地区（従来の調査では「山ノ神」地区と呼ぶ）に分け、さらにＢ地区は排水溝や既調査区によって分断されているためそれぞれ北からＢ－１地区、Ｂ－２地区及びＢ－３地区として設定した。調査面積は約1500㎡、昭和60年８月19日から開始して10月17日には現地での調査を終了した。

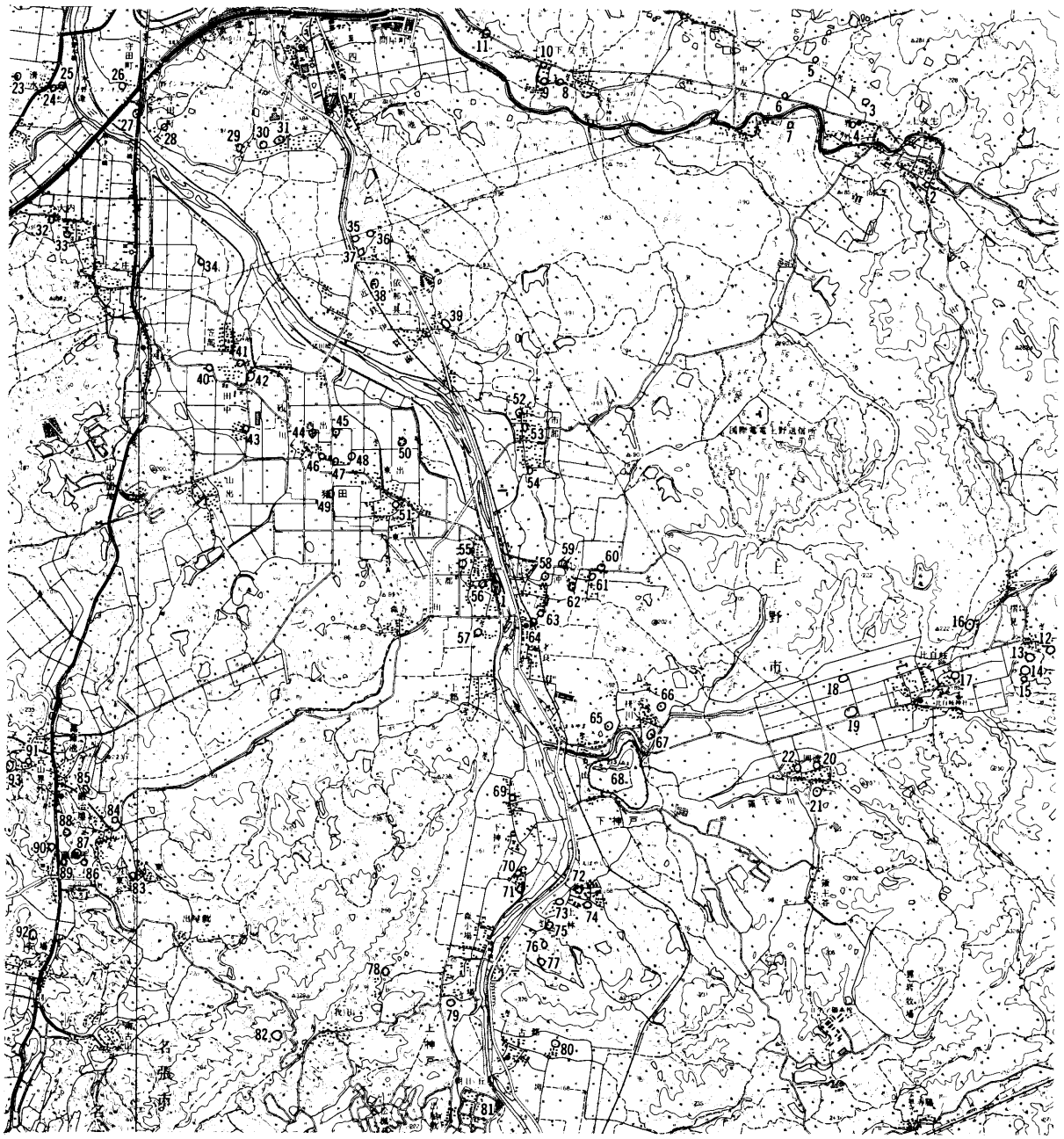
Ⅱ　位置と歴史的環境

青山高原にその源を発し、上野盆地を北流して京都府に至る一級河川木津川（旧長田川）は、現在の位置よりもさらに東を、蛇行しその姿を変化させながら流れてきた。今日のように直線的に改修されたのは近世にはいってからのことであり、伊賀藤堂藩によって水運利用のために行われたものである。しかし、川幅の狭さと河床の高さから幾多の水害を免がれることはできず、川普請は何度もくり返された。

下郡遺跡は上野市の南部、上野盆地の中央に位置し、木津川左岸の標高約150ｍの沖積地である。下郡は現在上野市であるが、以前は名賀郡依那古村に属しており、当時の村の地勢は昭和３年の『三重縣名賀郡依那古村治一覧』には次のように記されている。「本村ハ名賀郡ノ東北端ニ在リ北及東ハ鈴鹿山系ニ属スル山地連亙シテ自然ノ村界ヲ為シ南西ノ一隅亦山地ニシテ北東ノ連峯ト相対ス此両高地ノ間ヲ長田川南北ニ縦貫シ沿岸一帯ニ柘ケテ担々タル平野ヲ形成ス」とあり、さらに「地味概ネ肥沃ニシテ禾穀豊饒米麦ノ産額郡内随一ト称セラレ山地亦樹木茂リテ薪材豊富ナリ」といわれるように、山地による自然の境界の中で往古より豊かな地であったと推定される。木津川をルートとして近畿地方との結合関係が考えられている[⑥]ように、縄文時代には木津川に沿った地域に遺跡が点在しており、下郡遺跡付近でも田中遺跡や才良遺跡など右岸左岸ともに確認されている。弥生時代には山麓部からしだいに平野部にかけて拡大し、神座山遺跡・西浦遺跡・森寺遺跡など中・後期に属する遺跡が下郡遺跡周辺に見られる。

古墳時代にはいると遺跡数はさらに増加し、木津川流域の丘陵端部に古墳が点在する。下郡遺跡のすぐ西側丘陵端部にも猪田神社古墳群・唐木谷１号墳・森寺古墳群などが確認されており、木津川との間にある平野部にも彼岸台遺跡のように古墳時代の集落跡の存在が推定される。

一方、この付近は、伊賀郡衙の所在地としても考えられている。『日本書紀』の記述から推定したものであるが、地名の検討によるもので考古学的にも文献的にもその確証はない。奈良時代には才良廃寺が造立され、平安時代にはいると藤原摂関家による荘園支配が下郡遺跡を含む伊賀郡猪田郷で行われる。しかし時代とともに中央政権の衰退が始まり、地方支配の乱れと相まって各地に在地小領主層が台頭しはじめる。さて下郡遺跡独自の歴史については縄文時代から遺物の出土がみられ、明確な遺構群は古墳時代になって現われる。以後奈良時代・平安時代とそれぞれに遺物が出土し、鎌倉時代以降中世から近世にかけて多くの遺構群が検出されている。この中世から近世にかけての遺構群は、第６次調査で下層遺構として弥生時代及び古墳時代の溝の存在が明らかとなったように、中世以前の遺構を破壊して成立



第１図　遺跡位置図（１：50,000）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	下郡遺跡(館跡)	2	沢氏城跡	3	安田氏館跡	4	塚本館跡	5	日野地氏館跡	6	田中氏館跡	7	田中氏城跡
8	山ノ井氏館跡	9	西岡氏館跡	10	中切館跡	11	清水尻館跡	12	重富氏館跡	13	荒堀氏城跡	14	竹岡氏城跡
15	中川氏館跡	16	三藤氏館跡	17	荒堀長川館跡	18	城屋敷館跡	19	城の前館跡	20	竹田氏館跡	21	岡波館跡
22	浅野氏館跡	23	神ノ木館跡	24	直居館跡	25	清水北館跡	26	市場氏館跡	27	吉富左近館跡	28	長岡城跡
29	中森氏城跡	30	知高左衛門城跡	31	増田氏館跡	32	今井氏館跡	33	加藤将監館跡	34	古城館跡	35	狭間城跡
36	北の城跡	37	城山城跡	38	小泉氏館跡	39	大井氏城跡	40	広氏館跡	41	菊永氏館跡	42	松尾氏館跡
43	山田氏館跡	44	仏勝寺館跡	45	薮中氏館跡	46	堀田氏館跡	47	竹内氏館跡	48	乾氏館跡	49	沢田館跡
50	森田氏館跡	51	広岡氏館跡	52	西岡氏館跡	53	宮岡氏館跡	54	願興寺氏館跡	55	下代館跡	56	加納氏堡推定地
57	石田氏堡	58	藤田氏館跡	59	菊田氏館跡	60	藤島氏館跡	61	勝原氏館跡	62	高田氏館跡	63	福田氏館跡
64	貝野氏館跡	65	滝川三郎兵衛砦跡	66	城氏館跡	67	嵯峨尾主馬砦跡	68	丸山城跡	69	磯田氏館跡	70	広浜氏館跡
71	古浜氏館跡	72	服部相賀氏館跡	73	稲田氏館跡	74	矢具島氏館跡	75	岩名氏館跡	76	中原氏館跡	77	山村氏城跡
78	永浜氏館跡	79	夷山城跡	80	古郡氏館跡	81	恩常寺城跡	82	我山城跡	83	中原氏館跡	84	鍛冶屋氏堡
85	井崎館跡	86	奥屋敷城跡	87	蔵縄手城跡	88	中村氏館跡	89	高沢氏館跡	90	田仏城跡	91	吉川氏館跡
92	安場氏館跡	93	吉川氏堡										

第1表　遺跡地名表

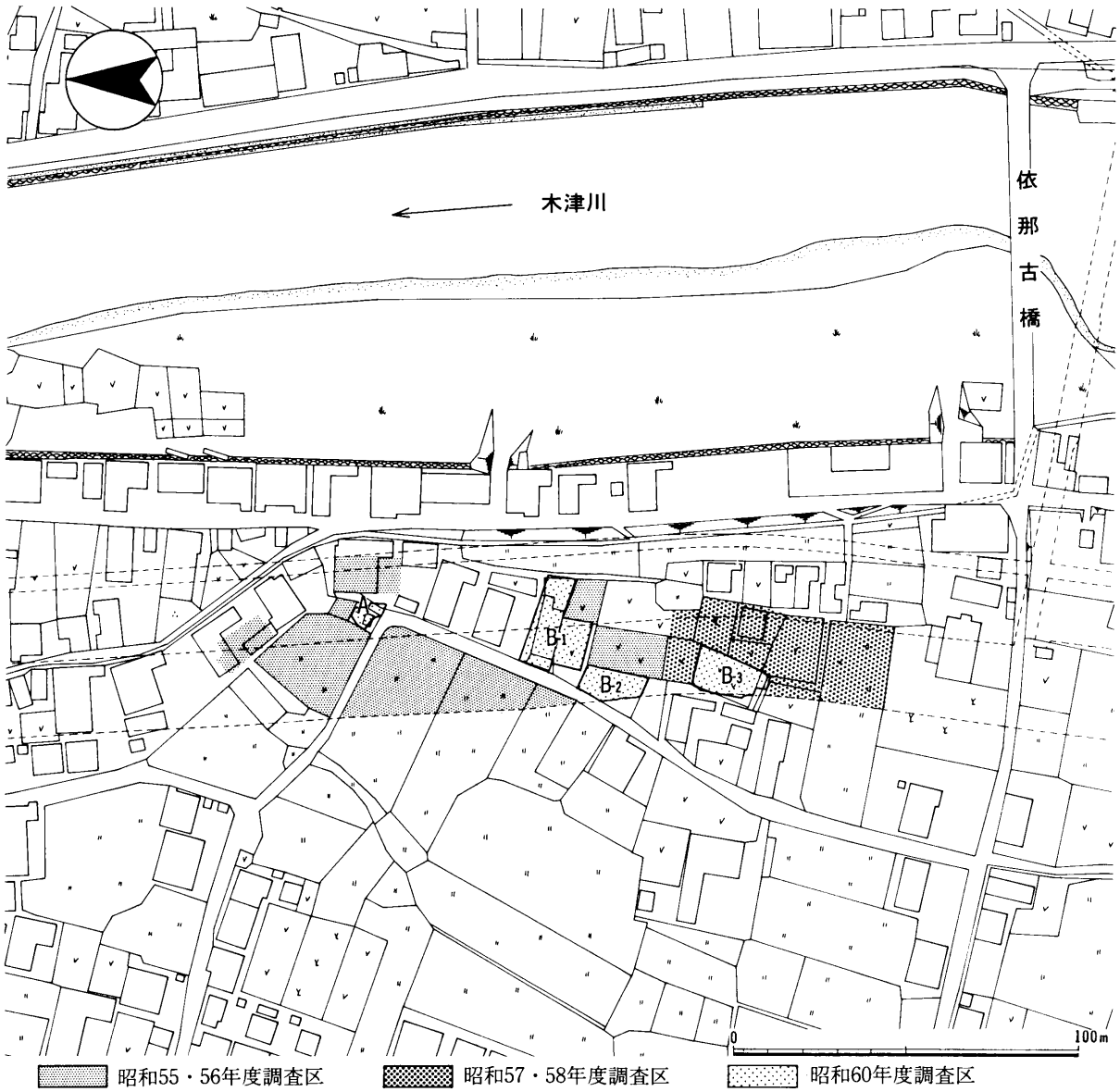
第2図　遺跡地形図（1：10,000）

している可能性もある。下郡遺跡が複合遺跡といわれる所以である。

伊賀地方において、中世の遺構として最も顕著なものは城館跡である。この地方でおよそ500を数える中世城館跡のうち発掘調査の実施されたものはわずか数パーセントであるが、そのほとんどが15世紀後半から16世紀代にかけて築造されている。このことはほとんど時期を同じくして多数の中世城館が成立していたことを示すが、中世における多数の在地小領主の存在がそれを裏付けている。

下郡遺跡内では、すでに上野市下郡遺跡調査会の手によって中世城館跡が確認されている。調査は一部分であったが西北・西南・東南の３隅を確認し、方形の堀と考えて内法東西約45m、南北約67ｍの長方形の城館規模を想定している。そして「堀内は、比較的短時期に埋まる状況がみられ、城館はその取り壌(ママ)わしによって廃絶した」と考え、その時期を16世紀代においている。[7] これが下代館跡（55）にあたる。ほかに加納氏堡推定地（56）と石田氏堡（57）があるが確認調査はされていない。

このように伊賀地方においては大部分の中世城館が山上ではなく平野部に築造され、しかも互いの距離をあまり経ずして１集落に複数の館が存在し、ほぼ同時期に廃絶している。これは天正伊賀の乱もさることながら、幕藩体制社会の中で伊賀藤堂藩によって藩体制に組み込まれていった在地小領主層の姿を如実に物語っている。



第３図　発掘区位置図（１：2,000）

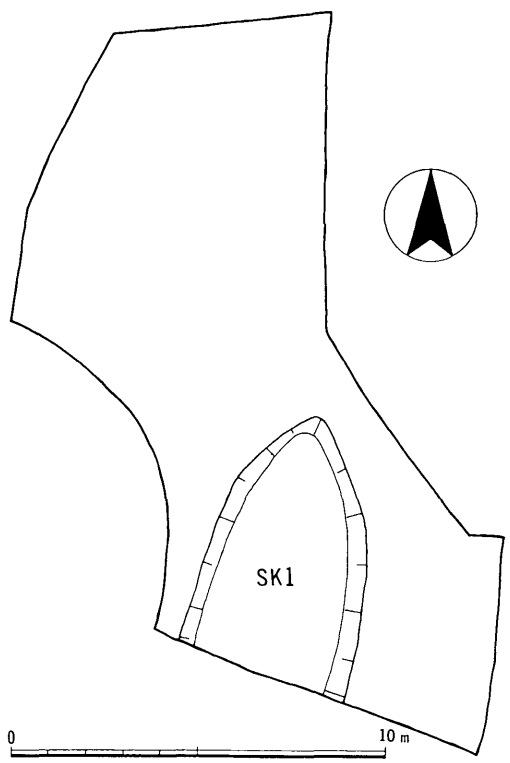
III　遺　　構

調査区をＡ地区とＢ地区との分けて設定した。双方は60～70ｍほど離れているために相互の遺構の関連性については厳密性を欠くが、Ａ地区については第３次調査及び第４次調査で、Ｂ地区については第３次調査、第４次調査及び第６次調査でそれぞれの隣接部から遺構が検出されているため、それらとの関連性において考えることが可能である。

１．Ａ地区の遺構

Ａ地区は道路（簡易舗装、一部分未舗装）と「観音堂」と呼ばれる祠の立つ部分で、その地の性格上最終年次調査まで残されていた部分である。調査前から予想されたように祠設置のためのコンクリート土台、祠周辺の植木、数回行われた道路整備、簡易水道管の埋設など後世の撹乱が著しく、わずかに調査区南端から土坑が検出されたのみである。

ＳＫ１　調査区南端から検出され、さらに南にのびる溝の可能性もあるがここでは土坑とした。全体に中央に向かってゆるやかに落ち込んでおり、幅約４ｍ、深さは中央部で40㎝ほどである。埋土は暗灰褐色砂質土であるが、埋土直上まで道路整備の際の詰め石やコンクリートブロック片が多量に見られることから、ある程度の削平を受けたものと思われる。埋土中からの遺物は検出されていないが、埋土上層の撹乱層からは土師器皿、擂鉢が出土しており、遺構に伴う可能性もある。



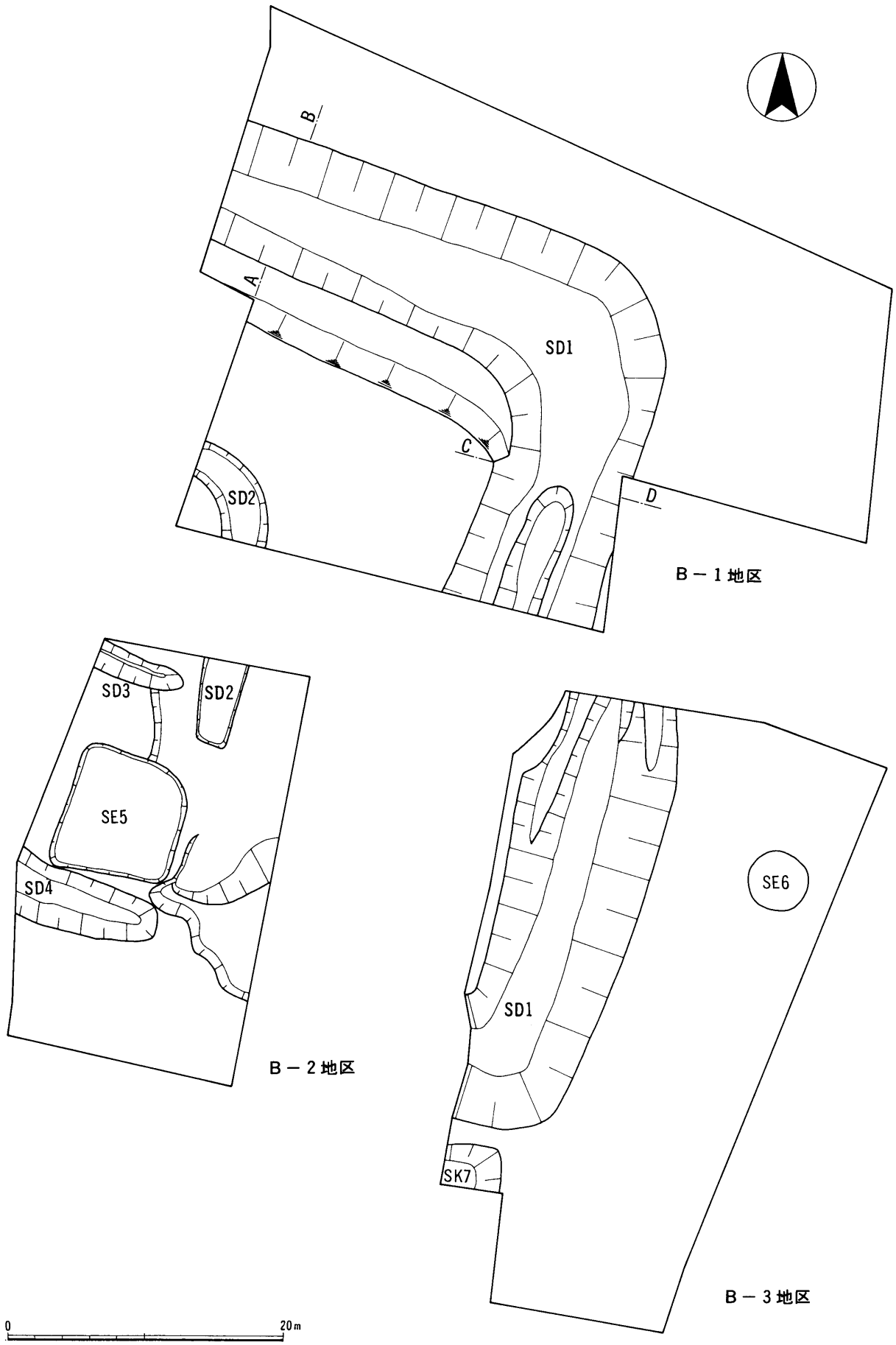
第４図　Ａ地区遺構平面図（１：500）

２．Ｂ地区の遺構

Ｂ地区は排水溝、第４次調査区及び第６次調査区によって３ヵ所に分断されている。検出された遺構は堀状の大溝（ＳＤ１）とほかに３条の溝（ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４）、井戸２基（ＳＥ５・ＳＥ６）と土坑１基（ＳＫ７）である。Ｂ地区は便宜上、北よりＢ－１地区・Ｂ－２地区・Ｂ－３地区と設定したが、前述の遺構のうちＳＤ１はＢ－１地区よりＢ－３地区に続き、ＳＤ２はＢ－１地区よりＢ－２地区に続く。

ここでは大溝ＳＤ１は堀と考え、堀の内側で検出された遺構（ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＥ５）と堀の外側で検出された遺構（ＳＥ６・ＳＫ７）とに分けて扱うことにする。これは堀を中心に考えることによって、その内側と外側の遺構の成立・存続時期など遺構の性格上の差異の有無を検討するためである。

ＳＤ１　Ｂ－１地区のほぼ中央が堀の角部分にあたり（この遺構を中世城館のものと考えるとその北東隅にあたる）、西側は道路で、南側は排水溝によって分断される。この先は今年度の調査区外であるが、西側は道路を経て第３次調査でＳＤ20として確認されており、南側も排水溝を経て第４次調査及び第６次調査で同一堀として確認された。さらにＢ－３地区においても同一の堀が検出され、調査区の南で曲がり西に向かっている。（この部分が館の南東隅にあたる）。堀の各角隅はほぼ直角に曲がっている。幅は約５ｍ、深さは1.2～1.4ｍで断面形は北辺部は箱薬研堀であり（第６図上図）、東辺はむしろ薬研堀に近い（第６図下図）。これは第３次調査及び第４次調査の結果とも一致する。埋土は大別して２層あり、上層は褐色系の酸化層（第６図埋土Ｉ層）、



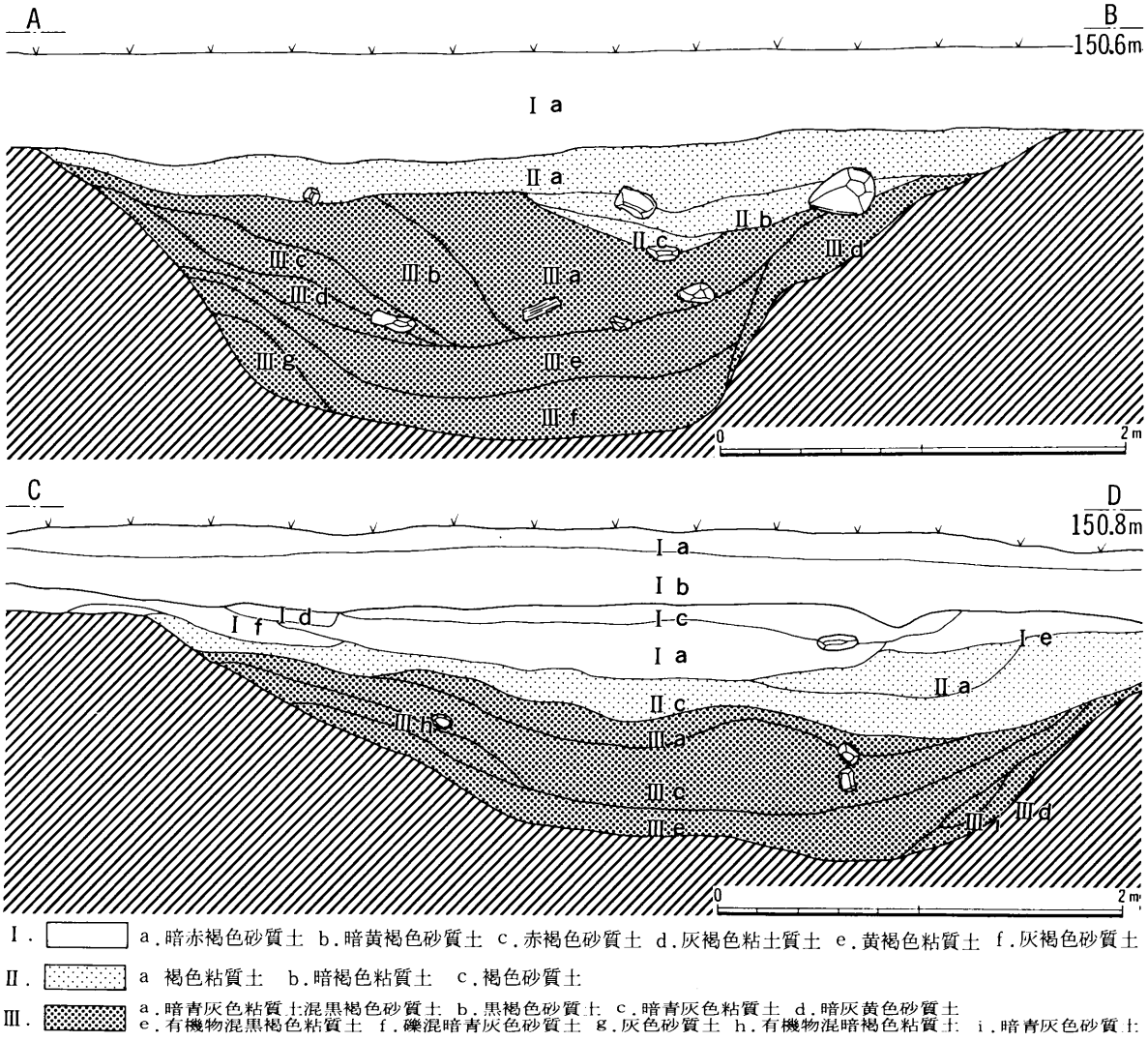
第5図　B地区遺構平面図（1：400）

下層は青灰色系の還元層（第６図埋土Ⅱ層）である。全体的に長期間にわたる堆積と考えられるが、北辺部の還元層上層（第６図上図Ⅲａ層～Ⅲｄ層）に関しては比較的短期間に堆積したものと思われる。堀は極めて堅固な地盤を掘削しており、還元層は水分を多量に含んで泥水状態であった。Ｂ－１地区西側付近で還元層上面近くに多量の人頭大の石が埋没し、さらにＢ－１地区の堀の還元層中には１～３ｍほどの自然木が10数本埋没していた。Ｂ－１地区の南に続く第４次調査区においても堀の還元層中底付近で数本の自然木が埋没していたがそれは堀の北端部のみであり、その南に続く第６次調査区内の堀では検出されず、さらに南のＢ－３地区の堀の還元層中には石も自然木も検出されなかった。出土遺物は還元層中から青磁椀、天目茶椀、擂鉢などが、酸化層中からは土師器皿、鍋、陶器椀、擂鉢、甕などがあげられる。また還元層と酸化層の境付近で堀壁面に接して石臼も出土した。土塁については、Ｂ－１地区南端で断面の観察作業を実施したが確認できなかった。

ＳＤ２　ＳＤ１の内側にあり、Ｂ－１地区でＳＤ１と同様にほぼ直角に曲がって南へのび、Ｂ－２地区で終息する。地盤をほぼ垂直に掘り込んでおり、幅約1.5ｍ、深さは70cm程度である。埋土は褐色系の砂質土層２層であり、断面観察から極めて短期間で埋没したものと考えられる。出土遺物には土師器皿、鍋などがある。

ＳＤ３　Ｂ－２地区北端で西から東にのびる溝で、ＳＤ２の手前で終息する。幅約１ｍ、深さは50～60cmである。ＳＤ２と類似の埋土によって、ほぼ短期間に埋没したものと思われる。

ＳＤ４　Ｂ－２地区のＳＥ５南側を東西に走る溝で調査区中ほどで終息する。幅約２ｍ、深さは60cm

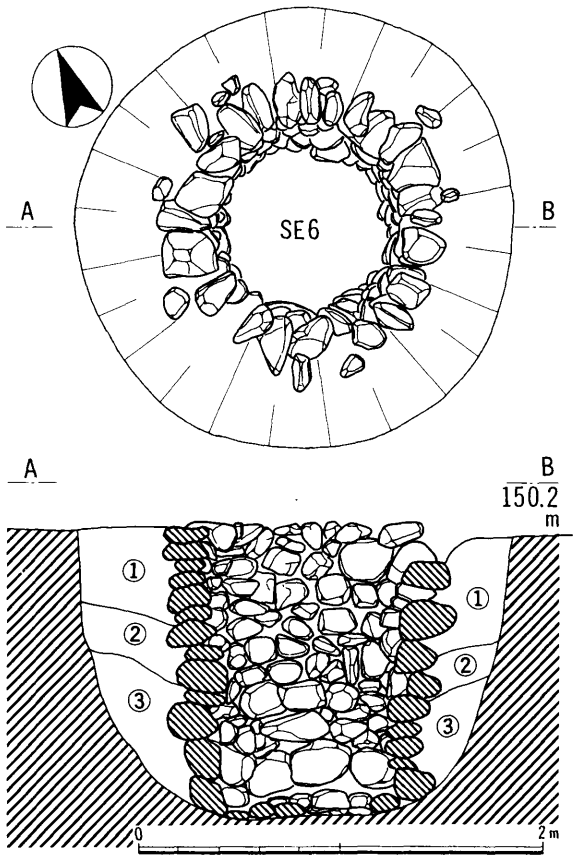


第６図　ＳＤ１断面図（１：40）

ほどでＳＥ５をはさみＳＤ３と平行する。埋土は上層は暗褐色砂質土の酸化層であり、下層は暗青灰色粘質土の還元層である。この埋土上層部からは宝篋印塔の基台が１点、ほかの小児人頭大の石に混じって出土している。

ＳＥ５　Ｂ－２地区の中央付近で検出された。１辺約４ｍの方形に近いプランの掘形をもつ井戸で、川原石による石組のものである。調査中検出された時点では掘形のほぼ全域にわたって川原石が積まれたように散乱しており、それらの石を除去した後井戸の径を測定したが、特に南側と東側の積石の崩壊が著しく1.2～1.6ｍ程度と判断された。井戸内の調査は、積石の崩落と地表面下１ｍ付近の湧水のため作業を中断した。全調査終了後、掘形断面の観察の結果上層の暗茶褐色粘質土層の部分にのみ井戸の積石が残り、下層の砂質土層の部分の積石はすべて崩壊していたことが確認された。また石の大きさ、積み方ともに統一性はなく乱雑である。

ＳＥ６　Ｂ－３地区北東隅から検出され、ＳＤ１の外側に位置する。掘形は径約1.1ｍの円形を呈し、



①赤褐色粘質土　②赤褐色砂質土　③黄灰色砂質土

第７図　ＳＥ６実測図（１：40）

川原石による石組井戸である。掘形埋土は比較的堅く締まっており３層に分けられる。石組の内径は上端で約50㎝、中ほどで約40㎝であり、深さは検出面より約70㎝で小型の井戸である。使用されている川原石も比較的小振りのものであるが、面をそろえてていねいに積まれており、石と石の隙間には小石がはめ込まれている。全体的に小規模な井戸であるが整った円形を呈しており、第６次調査の際に検出された井戸（ＳＥ４）はこのＳＥ６より５ｍほど北側であり、規模・形状ともに極めて類似しており、同時期の所産と考えられる。井戸内からは土師器皿、鍋、陶器椀などが出土した。全地区調査終了後、ＳＥ５とともに断面観察を行ったが、井戸底部においても湧水など水分は全く認められなかった。

ＳＫ７　Ｂ－３地区南西端にあり、ＳＤ１の外側にあたる。ＳＤ１南辺の肩部とは１ｍ弱の距離にある。隅の部分のみが検出されたためどのような広がりをもつものかは不明であるが、ここでは土坑として扱った。ＳＤ１検出面よりの深さは約30㎝であるが、調査区の壁断面観察の結果、さらに20㎝ほど上面から掘り込まれていることが確認された。埋土は黒褐色砂質土で比較的軟弱であり、他の遺構埋土とは全く異なるものである。埋土はほぼ１層で一気に埋められた状態であり、出土遺物は近世陶磁器の皿や椀類の破片であるがそれらもかたまって埋没しているところから、ＳＤ１の埋没期よりもさらに後に廃棄物の捨て場所として使用されていた可能性が高い。

そのほかにＢ－２地区北東部付近一帯に、10～20㎝ほどの石が不定形ながらまとまって敷きつめられたような状態で検出された。この調査区の東側の第４次調査区においてもこの部分に石が集中して検出されており、何らかの遺構の可能性もあるがその性格は不明である。

また、上述の石を除去したところ下層にごく緩やかな窪地状の落ち込み部分が検出され、かなり撹乱を受けていたが埋土中から高杯脚部、須恵器杯蓋及び身の破片がまとまって出土した。高杯脚部はＳＥ５の掘形埋土中からも出土しており、その性格は不明であるが、ＳＥ５成立以前に存在した遺構の残存部である可能性が高い。

Ⅳ　遺　　物

出土遺物は、包含層出土遺物と遺構出土遺物に分けられる。前者は古墳時代に属し、その出土状況から判断して後世の人為的な撹乱か河川の氾濫など自然的な撹乱によったものであり、後者は室町時代以降に属し、直接遺構に伴うもので遺構の時期検討にも重要な役割を果すものである。

１．包含層出土遺物（古墳時代）

(1)　土師器

高杯（１～３）　３点とも脚部のみである。（３）は淡褐色を呈し、他は赤褐色を呈する。（１）は杯部内面及び脚部外面がナデにより、（２）は内外面とも、（３）は外面のみナデによる調整が加えられている。（２）はＢ－１地区のＳＤ１埋土上層より、（１・３）はＢ－２地区のＳＥ５掘形埋土より出土しており３点ともに磨滅が著しい。

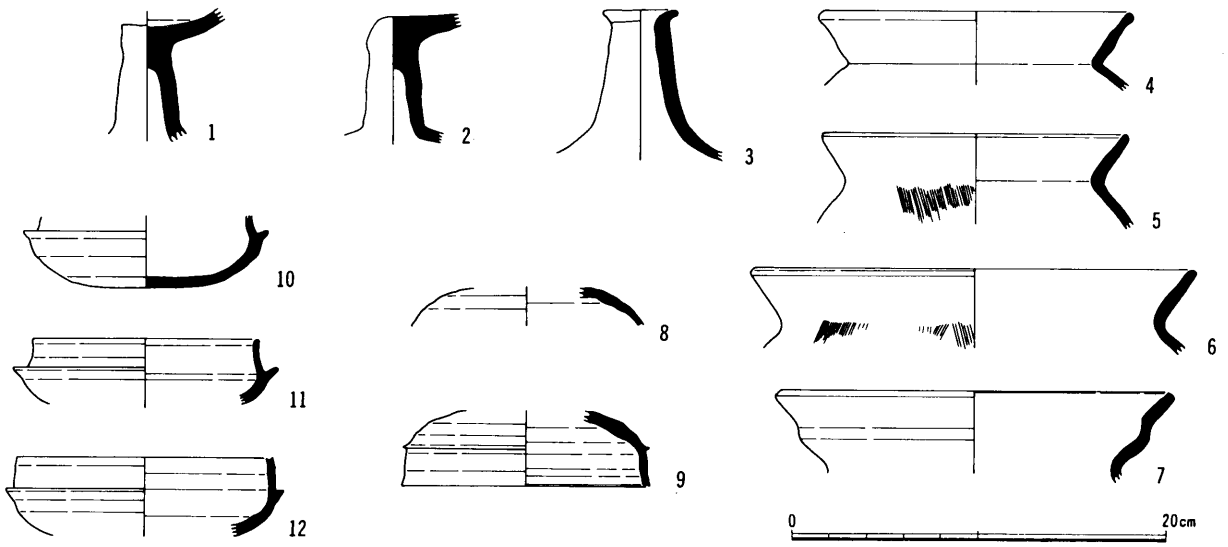
甕（４～６）　ともに「く」の字に外開する口縁部であり（４・５）は口径17cm前後、（６）は口径24cmである。（５）は淡褐色、他は肌色を呈し、ともに内外面ヨコナデ調整される。（５・６）は体部に縦方向のハケメ調整をもつ。（５）はＢ－１地区のＳＤ１埋土上層から、（４・６）はＢ－２地区のＳＤ２埋土上層から出土しており磨滅が著しい。

広口壷（７）　口縁部が２段に外反する二重口縁の形態をもち、内外面ともヨコナデされる。口径約21cm、肌色を呈し磨滅度が大きい。Ｂ－２地区出土。

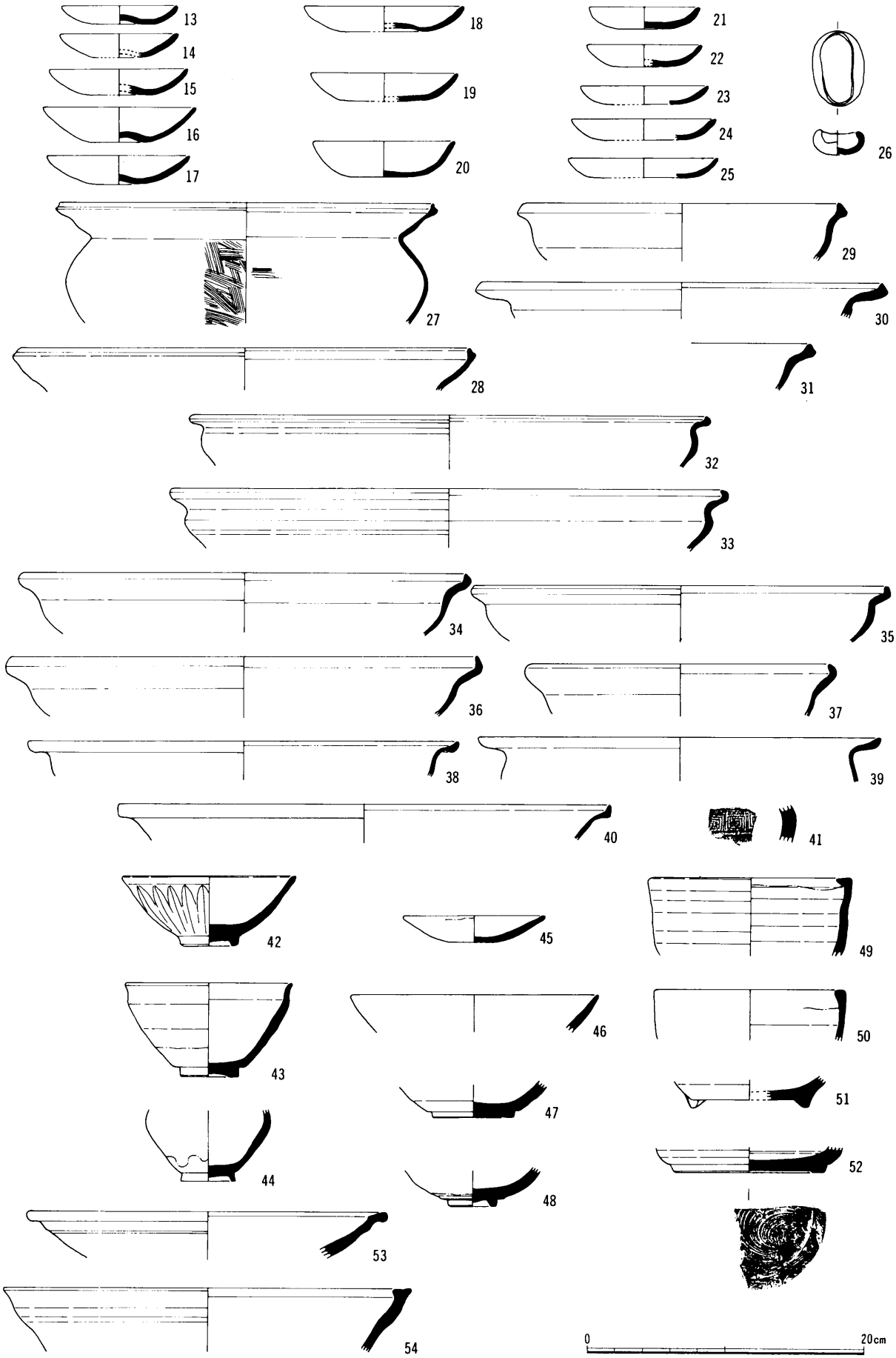
(2)　須恵器

（８・９）は蓋であり（10～12）は身にあたる。ともにマキアゲ、ミズビキ成形によるもので、青灰色もしくは暗青灰色を呈する。

蓋杯（８～12）　（８・12）は天井部外面⅔は回転ヘラ削り調整を施し、他の部分は回転ナデ調整を施す。ロクロ回転は右方向である。(12)は口径13.4cm、稜径13.2cm、口縁部高２cmで口縁部は下外方に下り、端部は内傾する凹面を成す。稜は丸い。断面色調は灰赤紫色で焼成不良である。(10)は受部径13.2cm、底体部高3.1cmでたちあがりは内傾してのび、受部は上外方にのびて端部は丸い。底体部外面⅔は回転ヘラ削り調整、他の部分は回転ナデ調整を施し、内面は不整方向のナデ調整である。ロクロ回転は左方向、残存高は3.8cmである。(11)は口径12.2cm、受部径14.2cm、たちあがり高1.5cm でたちあがりは内傾した後直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底体部外面は回転ナデ調整を施す。残存高3.4cm。(12)は口径13.8cm、受部径14.9cm、たちあがり高1.7cmでたちあがりは内傾してのび、端部は内傾する凹面を成す。受部は水平にのび端部は鋭い。底体部外面⅔は回転ヘラ削り調整、他の部分は回転ナデ調整である。ロクロ回転は左方向、残存高4.1cmである。（８）はＢ－１地区のＳＤ１埋土上層より、（11・12）はＢ－２地区のＳＥ５掘形埋土より出土している。



第８図　出土遺物実測図（１：４）



第９図　出土遺物実測図（１：40）

２．遺構出土遺物（室町時代以降）

（１）土師器

小皿Ａ（13～18）　いわゆる「ヘソ皿」と呼ばれるもので内面の中央部が盛り上がっている。径高指数は16～22であり、最小は（18）の小皿、最高は(16)の小皿である。（15）の内面はヨコナデにより、外面はオサエにより調整されるが、（15）以外のものは内面はヨコナデによる調整、外面は未調整である。赤褐色または灰褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

小皿Ｂ（19・21・22）　径高指数は19または20であり器壁はやや厚い。内面はヨコナデ調整、外面は未調整で褐色または暗褐色を呈する。

小皿Ｃ（20）　径高指数が25で深い。内面はヨコナデ調整、外面は未調整である。赤褐色を呈する。

小皿Ｄ（23～25）　径高指数は13または14である。（23）の内面はハケによる調整でていねいに、外面はオサエによって仕上げられている。（24）は内面ナデ調整、外面未調整で、内外面とも口縁部に多量のススが付着しており灯明皿として使用された可能性がある。（25）の内面はヨコナデによってていねいに仕上げられ、外面はオサエによる調整がされている。ともに淡赤褐色を呈し胎土は密である。

（14・15）はＡ地区ＳＫ１より、（13・16）はＢ－１地区ＳＤ１埋土下層より、（18・19・20）は埋土上層より出土した。（17・21）はＢ－２地区ＳＤ２より、（22～24）はＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より、（25）はＢ－３地区ＳＥ６埋土より出土した。

耳皿（26）　径5.4㎝の皿を曲げており、内面見込み以外はナデ調整、外面は未調整である。肌色を呈し、完形品としてＢ－３地区ＳＥ６底より出土した。

鍋Ａ（27・28）　張り出した胴部から頸部は「く」の字に内弯し、外開して口縁部で垂直気味に立ち上がる。器壁は薄く胴部にハケメ調整がみられる。

鍋Ｂ（29～31）　（29）は径23㎝の小型鍋である。（29・31）は丸味をもつ体部より口縁部はゆるやかに外上方に引き出されており、（30）は頸部でくびれた後に口縁部は「く」の字状に外に引き出されている。ともに内外面ともヨコナデによる調整が施され、口縁端部はつまみ上げられて断面三角形を呈する。淡褐色の外面にはススが付着する。

鍋Ｃ（32～37）　（32・33）は頸部でおさえられて口縁部は外上方に引き出されており、（34～37）は丸味をもつ体部より口縁部はゆるやかに外上方に引き出される。ともに端部はそのまま内側へ曲げられるかもしくは直立する。

鍋Ｄ（38・39）　体部より「く」の字状に口縁部は引き出され、そのままやや上向きに端部は引き上げられる。内外面ともにヨコナデ調整される。

鍋Ｅ（40）　ほぼ直線的な体部より口縁部は外側に引き出され、垂直に端部はつまみ上げられる。端部断面は三角形を呈し、外面に明瞭な稜線が走る。

（27）はＢ－２地区ＳＤ２より、（28）はＢ－１地区ＳＤ１埋土下層より、（31）は埋土上層より出土した。（30・39・40）はＢ－２地区ＳＤ４埋土上層より、（29・32～38）はＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

火舎（41）　口縁部の小片であるが、雷文が２本の沈線の間に連続して施文されている。淡赤褐色を呈し、Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

（２）陶磁器

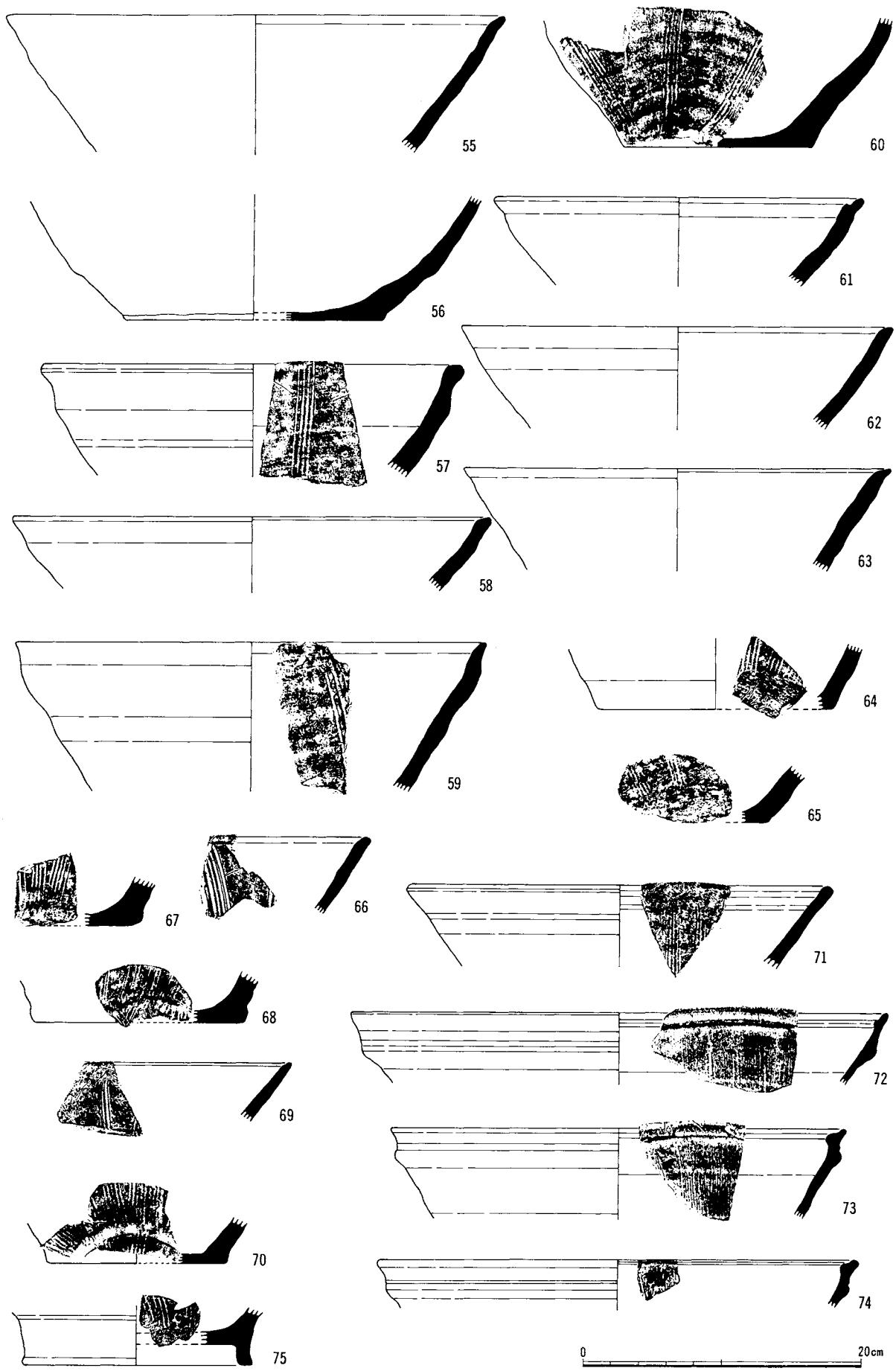
青磁椀（42）　龍泉窯系の椀で外面体部には片切彫の鎬蓮弁文をもつ。高台断面は四角であり、高台部畳付には一部に釉がかかるが高台部内部は露胎である。底部の器肉は厚い。Ｂ－２地区ＳＤ２より出土した。

天目茶椀（43）　ほぼ直線的な体部から口縁部で強く内側へオサエられ、端部は外反する。口径12.2㎝器高6.7㎝で黒茶色の釉がかけられ、削り出し高台である。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土した。

天目小杯（44）　濃い黒茶色の釉がかけられ、外面体部の釉薬が部分的に高台部分まで垂れる。直線的な体部は強く内側へオサエられている。外面体部下方（高台直上）付近にトチン跡が残る。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

小皿（45）　内面と外面口縁部に灰白色の釉がかけられ、体部にはススが付着する。灯明皿として使用されたものと思われる。Ｂ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

灰釉椀（46～48）　（46）は口径18㎝、黄褐色の釉がかかり、Ｂ－３地区ＳＥ６埋土より出土した。



第10図　出土遺物実測図（１：40）

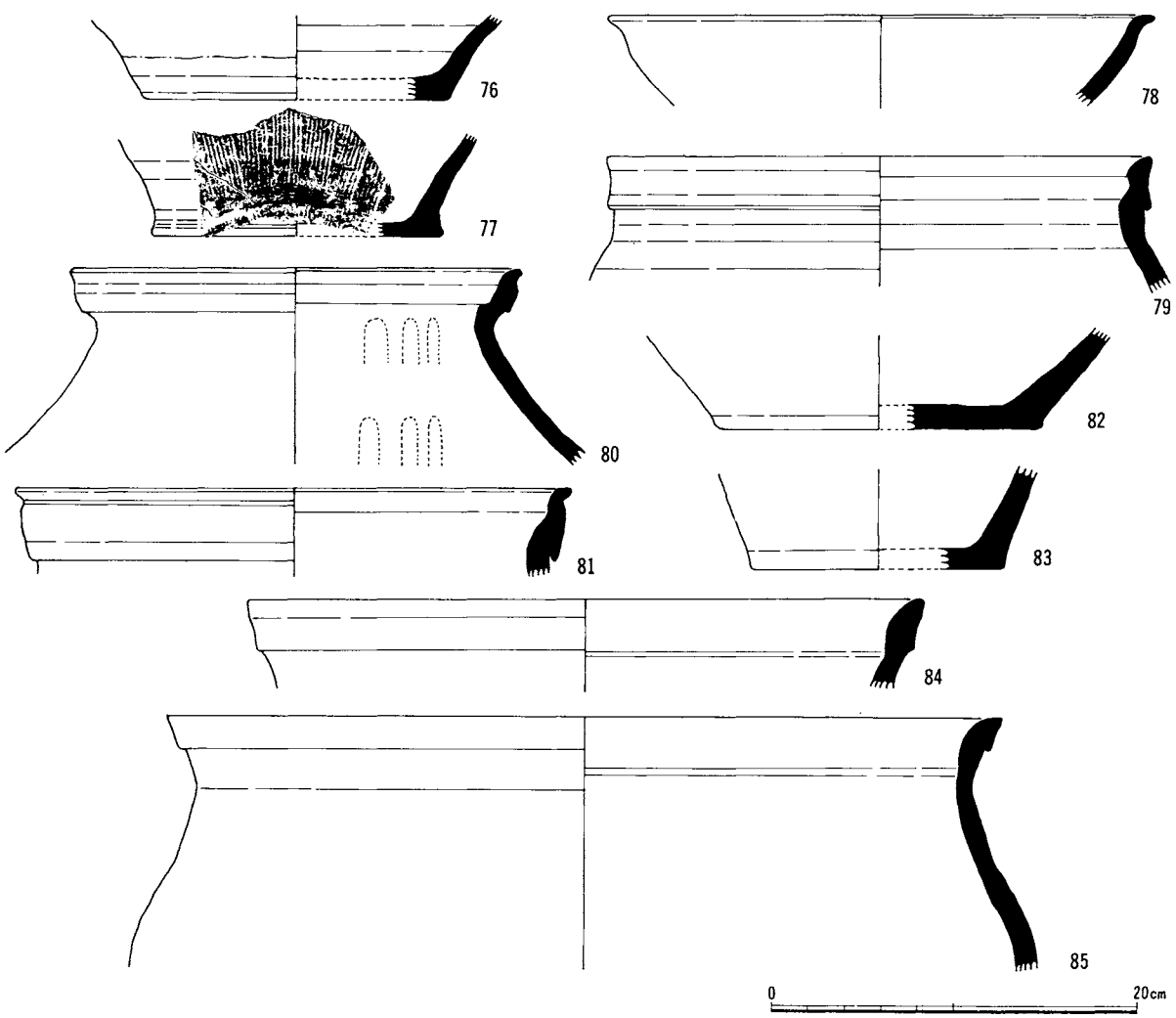
（47）は底径5.8cm、内面は緑褐色の釉がかかり外面は無釉である。Ａ地区ＳＫ１埋土上層より出土した。（48）は底径3.4cmの小椀底部で灰黄褐色の釉がかかり、Ｂ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

香炉（49～51）　外面と内面端部に乳白色または灰白色の釉がかかり、口径は14～15cmである。（51）は無釉で底径8.4cm、脚部は１脚のみ残存する。（49・50）はＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より、（51）はＢ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

鉢（52～54）　（52）は底径11cm、底部に回転糸切り痕を残し、Ｂ－３地区ＳＥ６底より出土した。（53）は灰釉で口径26cm、（54）は志野で口径30cmであり、ともにＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

擂鉢Ａ（55～66）　無釉で淡褐色を呈し、もろいものをＡ類とした。さらに厚手（55～60）と薄手（61～66）とに分けられる。体部は直線的に外開し、口縁部でゆるくオサエられるもの(55・58・59・63)と強くオサエられるもの（57）、ほとんどオサエのないもの（62）、強くオサエられ内傾する端面が凹線となるもの（61）に分けられる。外面は粘土巻き上げ痕を残して凹凸が著しく、内面底部は使用のためか磨滅している。筋目は４条を１単位とするもの（57・60・64）と５条を１単位とするもの（66）がある。（57・59・60・64）がＡ地区ＳＫ１埋土から（58・61～63）がＢ－１地区ＳＤ１埋土下層から、（55）がＢ－２地区ＳＢ４埋土下層から、（65）が同地区ＳＤ２埋土から、（66）が同地区ＳＥ５掘形埋土から、（56）がＢ－３地区ＳＥ６底からそれぞれ出土している。

擂鉢Ｂ（67～70）　無釉で赤褐色を呈し、硬質のものをＢ類とした。さらに厚手（67・68）と薄手（69・70）とに分けられる。体部は直線的に外開し（69）、底部はつぶれて外に出る（67・68）。筋目は



第11図　出土遺物実測図（１：４）

３条を１単位とするもの（69）と５条を１単位とするもの（67・68・70）に分けられる。（67）はＢ－１地区ＳＤ１埋土下層より、（68～70）は同地区ＳＤ２埋土より出土した。

擂鉢Ｃ（71～78）　鉄釉がかけられ、硬質で薄手のものをＣ類とした。体部が直線的に外開するもの（71）と口縁部で強くオサエられ縁帯ができ口縁部端面に１条の凹線がめぐるもの（72～74）、口縁部でオサエられ端部が外に水平に引き出されるもの（78）がある。底部に高台がつくもの（75）が含まれる。筋目は５条を１単位とするもの（71）、６条を１単位とするもの（73）、７条を１単位とするもの（72・77）があり、単位ごとの筋目の間隔は狭い。（78）はＡ地区ＳＫ１埋土上層の撹乱層より出土し、（71～77）はＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土している。

口径はＡ類については（61）の27cmを除くと32cm前後であるが、Ｃ類ではそれを上回り（72）のように40cm近いものもある。

甕・壷（79～85）　（79）は口頸部のみである。口径は30cm、ほぼ直立する口頸部をもつ。口縁部は「Ｎ」字状であり、口縁部内面は頸部との境に段をもつ。無釉で赤褐色を呈し５㎜前後の長石粒を多量に含む。Ａ地区ＳＫ１埋土より出土した。（80）はゆるやかに内傾する体部に「Ｎ」字状の口縁部がつく。口縁端部下で外面は肥厚し、内面は口縁部と頸部の境に段をもつ。内面には３筋の指圧痕が明瞭に残っている。口径は25cm、無釉赤褐色を呈し、３～８㎜の長石粒が混入する。Ｂ－２地区ＳＤ４埋土より出土した。（81）は口頸部のみである。口縁部は「Ｎ」字状であり、端部で外上方につまみ出されている。口径は31cmで、無釉茶褐色を呈し、３㎜程度の長石粒が多量に含まれている。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土した。（82）は甕の、（83）は壷の底部である。（82）は底径18cm、褐色を呈し、体部内面に自然釉がみられる。８㎜前後の長石粒が多量に含まれる。底部よりほぼ直線的に外開し、外面底部外側はヘラケズリにより、内側はナデにより調整される。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土した。（83）は底径14cm、無釉赤褐色を呈する。胎土には５㎜前後の長石粒が多量に含まれている。底部より直線的に外開する。外面底部付近はヨコナデによる調整が施される。Ｂ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土した。（84）は口頸部のみである。口径37cmで外面は淡褐色、内面は乳白色を呈する。無釉で３㎜前後の長石粒が混入する。頸部でくびれて口縁部は肥厚し、内面頸部に１条の凹線がめぐる。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土した。(85)は口径46cmの大型のもので無釉淡褐色を呈する。５㎜前後の長石粒が含まれる。外面はヨコナデにより、内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデによる荒い仕上げになっている。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

（３）瓦質土器

鍋（86・87）　（86）は口径23cmで暗灰色を呈し外面にはススが付着する。内外面とも口縁部はヨコナデによる荒い仕上げである。体部からゆるやかに外反する口縁部は頸部でくびれ肥厚する。また口縁端部には１条の凹線がめぐっている。Ｂ－２地区ＳＤ４埋土より出土した。（87）は口径26cmで暗灰色を呈する。内外面ともに口縁部はヨコナデによるていねいな仕上げである。外面体部は、７条の櫛状のヘラにより、底部から口縁部に向けて間隙なくかき上げられている。体部から「く」の字状に外反した口縁部は肥厚し、口縁端部は水平な面をもつ。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

羽釜（88）　口径は不明であるが25～27cm程度と思われる。鍔の厚みは約１cmであり、突出長は約２cmである。器壁は厚く、体部は丸味を帯びる。外面はヨコナデにより調整され、内面はナデによる荒い仕上げになっている。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

火舎（89～92）　（89・90）は同一個体の可能性がある。（89）は口径24cmで体部は垂直に立上がり口縁部は内上方に短くのびる。口縁部下で水平な面をなした３㎜ほどの突出部がある。(90)は底径26.5cmで体部は垂直に立上がる。底部は平底であり、体部を下方に拡張して高台とする。高台下方に３㎜程度の突出部がめぐっている。（89・90）ともに黒灰色を呈し、口縁部はヨコナデにより調整、体部外面はヨコナデによる調整が施されるが磨滅が著しい。底部内面はナデ調整される。また底部は体部に貼付けられている。Ｂ－２地区ＳＤ２埋土より出土した。

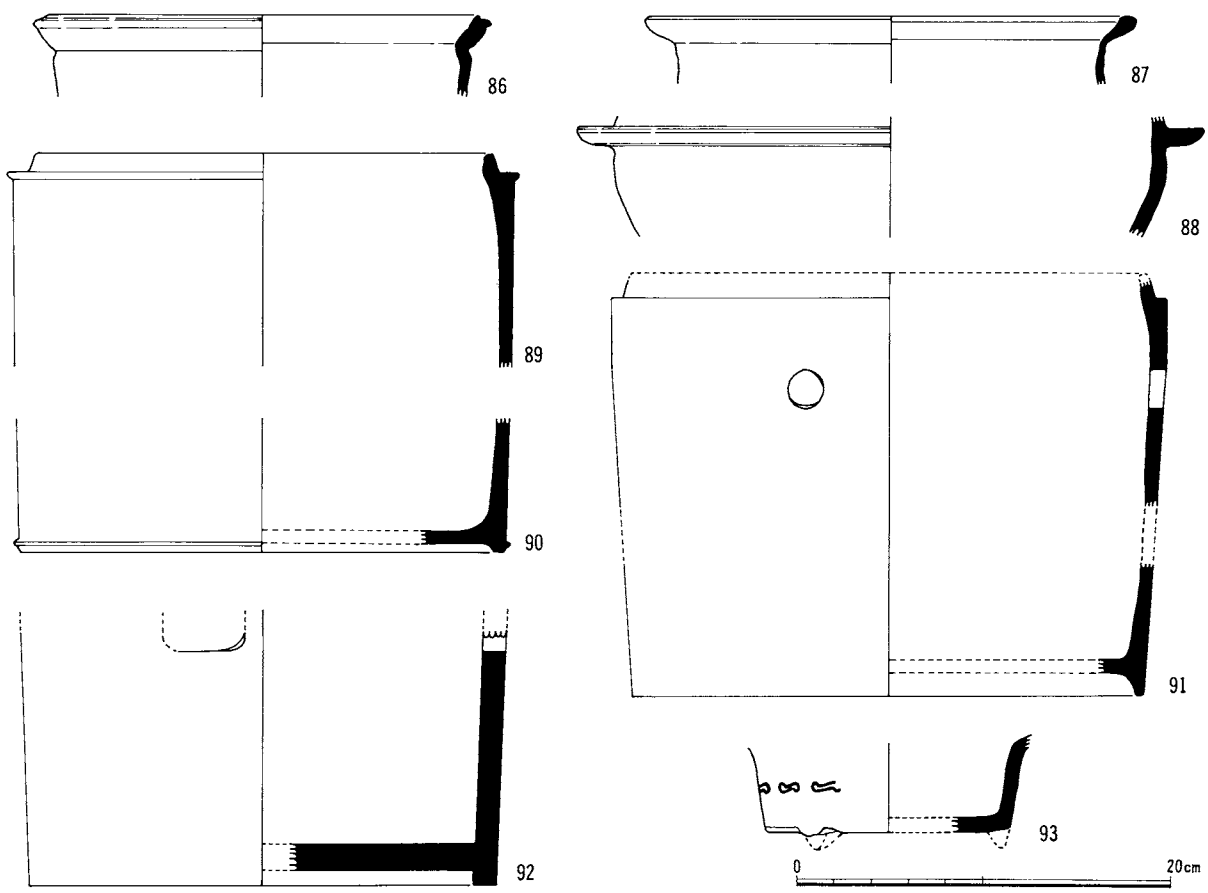
(91) は推定口径30cm、底径27.5cm、推定器高は22.5cmである。体部は底部に向かってやや内傾し、口縁部は内上方に短くのびる。体部上方に径２cmほどの穴を穿つ。底部は平底で、体部を下方に拡張して高台としている。口縁部はヨコナデされ、体部下方はヘラケズリの後ていねいにヨコナデされている。また底部内面もていねいにナデ調整されている。底部は体部に貼付けられる。黒褐色を呈するが、体部上方の一部分は火熱を受けて赤褐色となる。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。(92) は前者に比して器壁の厚い火舎である。底径は25cmで体部は垂直に立上がる。底部より約12cmの所に４cmを１辺とする隅丸方形の穴が穿たれている。底部は平底で、体部を下方に拡張して高台とする。底部は体部に貼付けられているが中央に径４cm前後の穴が穿たれており、この底部のみ他の用途として使用された可能性もある。体部外面はていねいにヘラミガキがされ、内面はナデ調整が施される。黒褐色を呈しＢ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

香炉 (93)　底径13cmで暗褐色を呈する。外面体部は縦方向にヘラミガキされ、横Ｓ字状のスタンプで施文される。外面底部はヨコナデされ、脚部の痕跡が認められる。内面はオサエによる荒い仕上げとなる。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土上層より出土した。

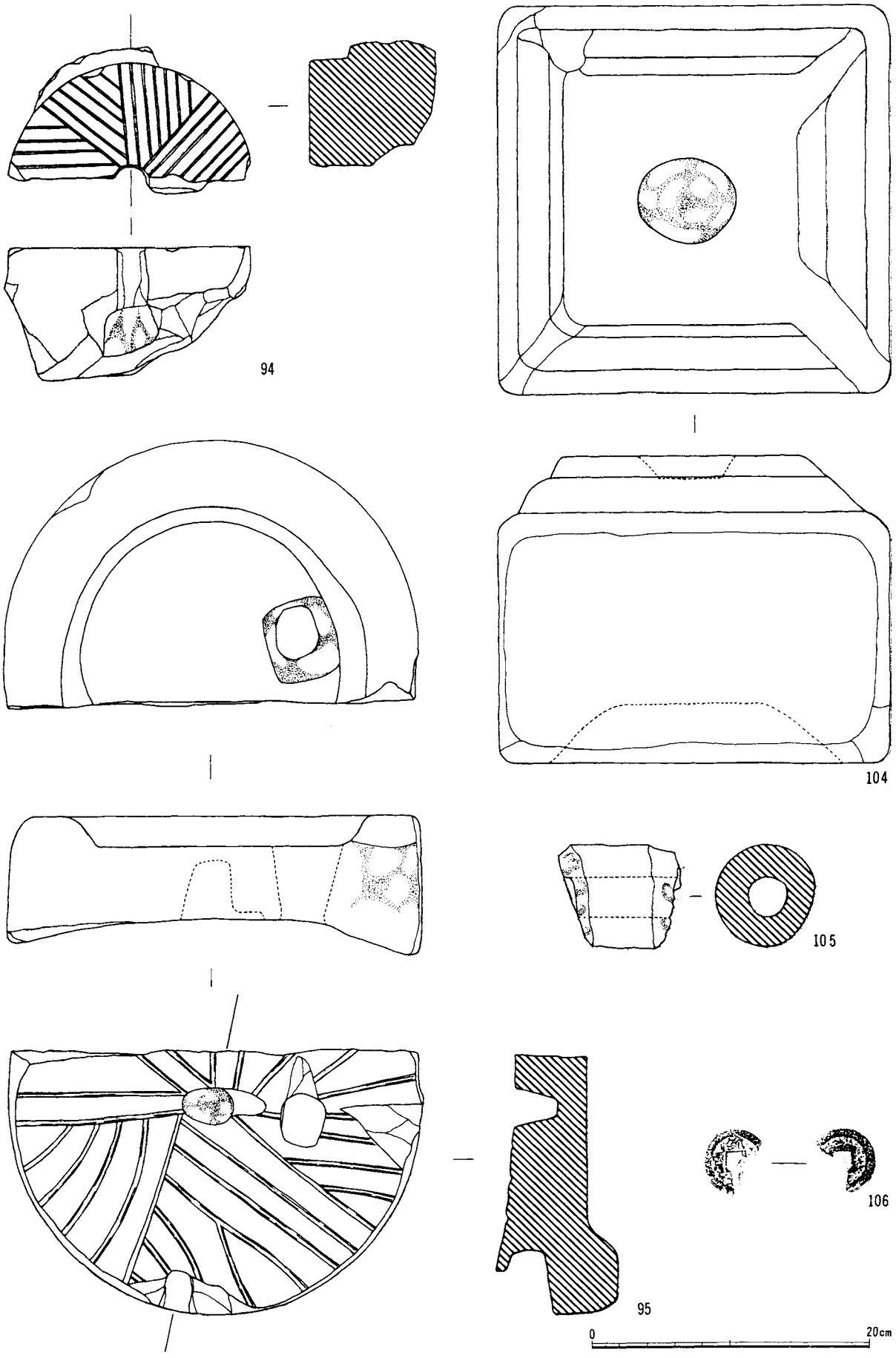
（４）石製品

石製品のうち五輪塔 (96～103) はＡ地区にあった「観音堂」と呼ばれる祠が移転した跡地に散乱していたものである。仮設道路に一部分埋もれていたものや付近の草むらの中からのものもあり、これらがすべてではないが、とくに今回確認された中世城館に何らかの関係があると考え、本報告書に載せることとした。従って (96～103) については今回の調査における遺構出土の遺物ではない。

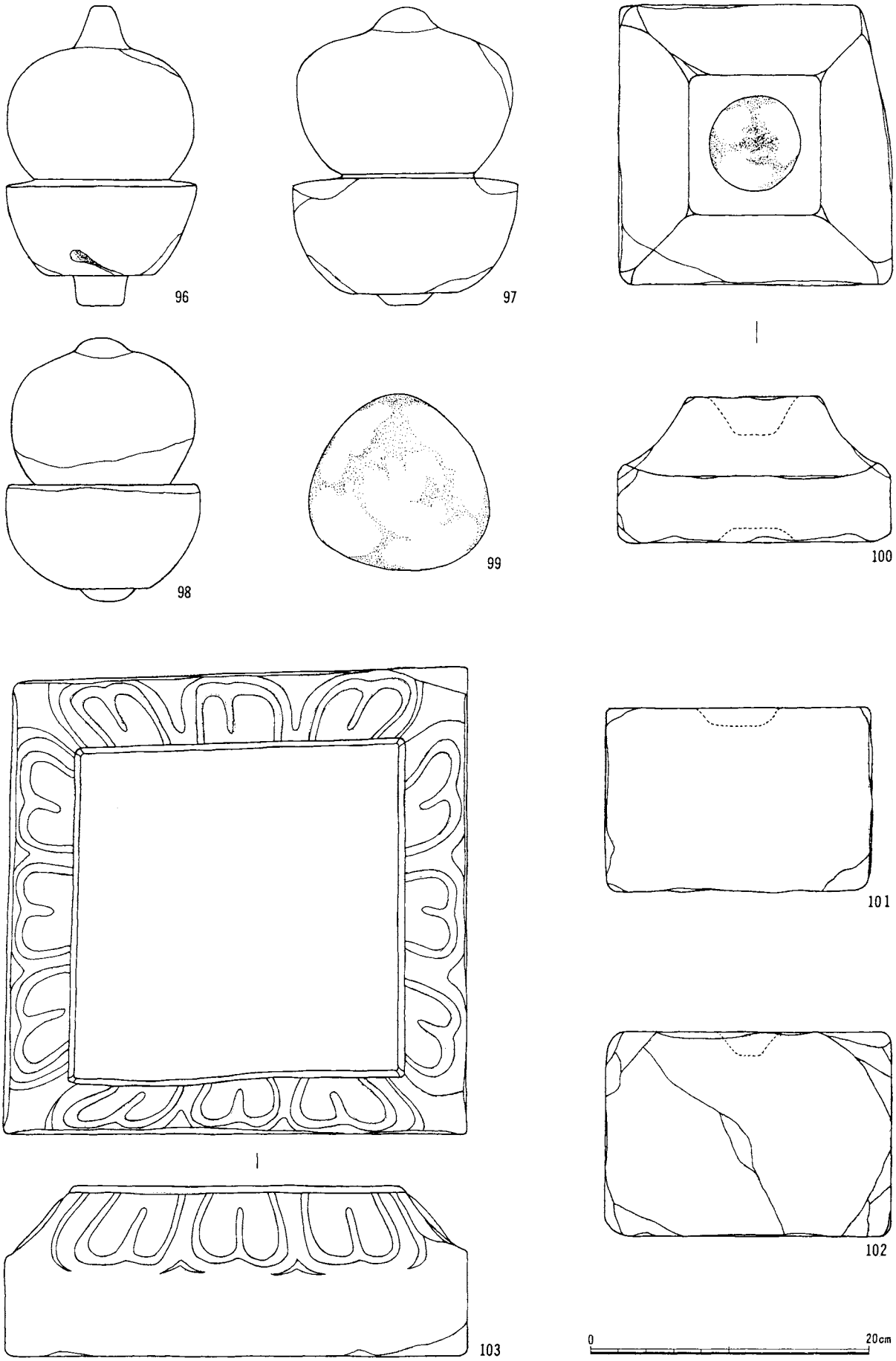
石臼 (94・95)　(94) は茶臼の下臼で受皿部は欠落している。花崗岩製で８分画６溝式のパターンである。器高9.5cm、芯棒受径２cm、同深さ4.5cmで、上面は使用による磨滅のためか、ふくみ幅はほとんどない。えぐりの高さ５cm、上径は18cmである。目については放射状の区画をもち、Ｖ字形の溝である。Ｂ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土した。(95) は粉挽臼の上臼で８分画３溝式のパターンである。器高10cm、外径30cm、内径17.5cmである。供給口径は



第12図　出土遺物実測図（１：４）



第13図　出土遺物実測図（106は１：２，他は１：４）



第14図　出土遺物実測図（１：４）

５cm、同深さは5.3cm、芯棒受径４cm、同深さ4.2cmである。ふくみ幅は大きく2.6cmあり、上縁幅6.5cm、同高さ2.2cmである。また深さ4.5cmの挽き手孔がつく。目については放射状の区画をもち、幅５mm、深さ２mmのU字形の溝がついている。Ｂ－１地区ＳＤ１西壁上、埋土下層と上層の境で出土した。

五輪塔（96～103）　(96～98) は一石で造られた空風輪で、その石質はいずれも花崗岩系のものを使用している。梵字等の刻字は認められない。全高は破損・磨滅を考慮すると20cm前後のものと推定される。(96・98) の空輪の最大幅はその中央付近にあり、(97) においては空輪の最大幅はその上端近くにある。風輪の最大幅は３点ともその上端近くにある。底部中央の枘は台形に彫出すもの (96) と半球形に彫出すもの(97・98)に分けられる。なお (97) には火を受けた跡がみられる。(100) は火輪で砂岩系の石質をもつ。梵字は認められない。高さ10.3cm幅20cmで、幅に対する高さの比率が小さく横広がりの形態をみせている。軒の端部は四方ともに破損している。四隅の屋根の流れはゆるやかな反りをみせ、上面の枘穴は逆台形に深く掘るが、下面の枘穴は浅い。裏面は粗敲打されており、火を受けた跡がある。(99) の水輪は砂岩系の石で造られているが全体的に磨滅が著しい。(101・102) の地輪は花崗岩系の石を使用している。方形で上面中央部に浅い枘穴を掘る。底面はノミ痕跡が残され、仕上げはされていない。梵字は認められなかった。(103) は花崗岩系の材質による台座である。四方の側面に複弁３葉を刻し、上面に５mmほどの段を彫出す。下面にはノミ痕跡を残す。底辺は約33cmで蓮弁と蓮弁の間には間弁を彫出す。

宝篋印塔（104）　基台の部分で砂岩系の石を用いている。底辺は28cmでその上部に２段の段を造り出し、その上面に塔身を受ける枘穴をもつ。また下面は大きく台形状に掘られている。Ｂ－２地区ＳＤ４埋土より他の石とともに出土している。

（５）金属製品

銭貨（106）　径2.3cmの「寛永通宝」でほぼ¾が残存しているが表裏ともに磨滅が著しく、「寛永□寶」と読める。裏面の模様は不明である。Ｂ－２地区ＳＤ３埋土上層より出土した。

（６）その他の土製品

フイゴ羽口（105）　先端部の破片で外径7.3cm、通風孔径2.8cmである。胎土には２mmほどの長石粒と砂粒が含まれており、先端部では鉱滓が一部コークス状に付着している。Ｂ－２地区ＳＤ４埋土より出土した。

Ⅴ　結　　語

下郡遺跡の第７次調査においては、中世館跡の堀が検出された。それは第３次調査（昭和55年度）、第４次調査（昭和56年度）及び第６次調査（昭和58年度）でそれぞれ堀の一部分が確認されており、第４次調査後に推定された中世城館の規模確認調査でもあった。その結果、城館の北東隅と南東隅の堀のコーナー部分が検出され、東側について南北一辺が60ｍの堀であることが判明した。それとともに堀の外側の地区においても井戸などが検出され、また城館の北にあたるＡ地区においても遺構・遺物が検出されている。これらの遺構が、確認された中世城館とどのように関係するのか、城館の年代・性格なども含め、遺構・遺物について考察を加えることによって問題点を整理し、同時にまとめとしたい。

１．遺構について

今回の調査で検出された遺構は、Ａ地区からＳＫ１、Ｂ地区からＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＥ５・ＳＥ６・ＳＫ７である。

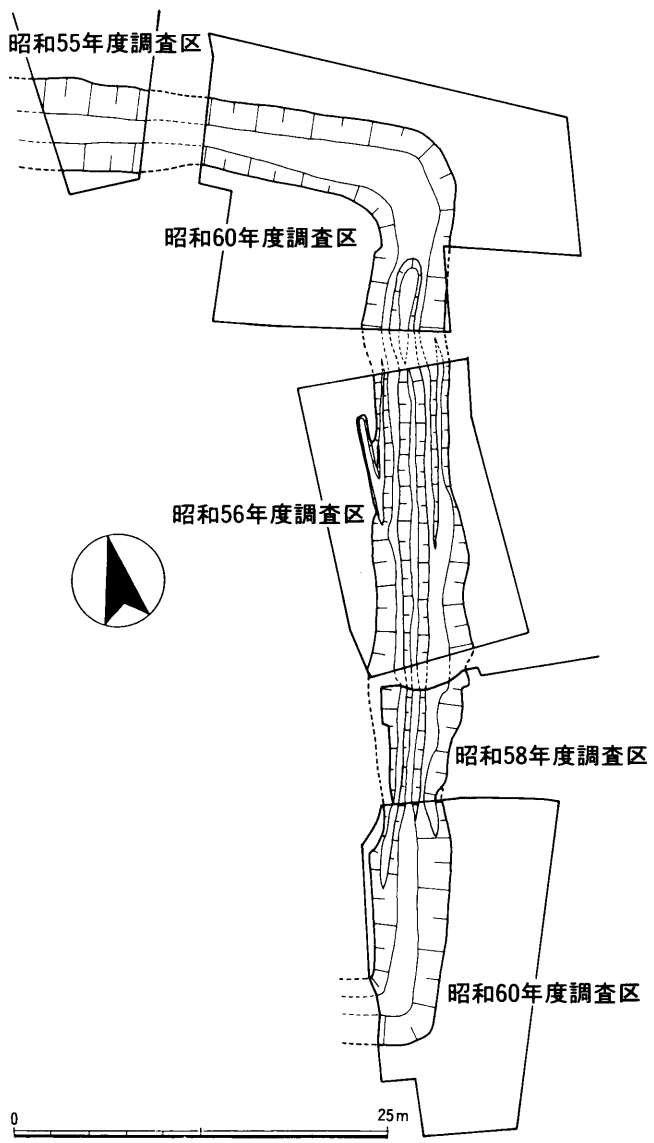
Ａ地区で検出された遺構はＳＫ１のみであったが調査区の周囲は第３次調査及び第４次調査によって確認済であり、掘立柱建物・柱列・井戸・池状石積遺構・溝・土坑などが検出されている。これらの遺構は前述の調査で中世後期から近世初期に属するものと判断されていることから、Ａ地区のＳＫ１も同時期に属するものと考えられる。

Ｂ地区のＳＤ１は幅約５ｍ、深さ1.2～1.4ｍで、第３次調査、第４次調査及び第６次調査によって検

出されたＳＤ20と結合させることによって南北約60ｍの堀と確認され、それは北と南でそれぞれほぼ直角に曲がって西にのびている。このことから判断してＳＤ１は伊賀地方におけるごく一般的な中世城館の堀と考えられ[9]方形にまわるものであろう。ただ、堀の内側に土塁状の遺構は検出されていない。堀の内側に検出された溝や井戸についても、この城館に伴うものと考えられる。

また、堀の外側で検出された井戸（ＳＥ６）と土坑（ＳＫ７）については、第６次調査で確認された井戸・溝・土坑などと関わると考え、室町時代後期から江戸時代後期にわたるものとしたい。

城館の南北一辺の長さは確認できたが、東西辺は未確認であるため、土塁の有無と合わせて城館の規模の確認が今後に残された課題である。



第15図　遺構配置図（１：500）

２．遺物について

出土遺物は、包含層出土のものと遺構出土のものに大別した。包含層出土の土師器・須恵器の時期は６世紀後半とするが、これらは遺構破壊後の撹乱によるものか他地域からの流入と考える。遺構出土の遺物は、土師器・陶磁器・瓦質土器・石製品・金属製品とその他の土製品に分類した。ここでは出土遺物中最も器形の多い擂鉢について考察を加えるとともに、同種の焼物である甕についても扱うことにする。

出土した擂鉢は、すべて信楽産と考える。施釉の有無・色調・焼成度によってＡ類･Ｂ類･Ｃ類とした[10]。信楽焼については窯跡の発掘調査の立ち遅れから、生産地での編年が確立していないため、各消費地において他の遺物との共伴関係によって年代が決定されているのが実状である。生産地の年代と消費地の年代とどの程度の誤差が生じるのか、生産技術の進歩と商品流通の問題と深く関わってくるが、ここでは消費地での調査報告例を参考とした。

擂鉢Ａ類は、滋賀県と京都府の報告[11]から判断して15世紀後半に比定したい。Ａ類はほとんどがＡ地区ＳＫ１埋土とＢ－１地区ＳＤ１埋土下層（還元層）から出土している。擂鉢Ｂ類は、Ａ類に続くものと考えられ、滋賀県と京都府の報告[12]から判断して16世紀前半に比定したい。Ｂ類はすべてＢ－１地区ＳＤ１埋土下層と同地区ＳＤ２埋土より出土している。擂鉢Ｃ類に関しては京都府の報告[13]により17世紀中葉とする。ただし（71）は16世紀末頃までさかのぼるかも知れないが、比定しうる明確な資料がないので即断できない。Ｃ類は１点を除きすべてＢ－３地区ＳＤ１埋土上層より出土している。

また甕についてはいずれも信楽産と考え、（80・81）は15世紀前半[14]、（79）を15世紀後半[15]、（84）を15世紀末から16世紀初[16]とする。（79）はＡ地区ＳＫ１埋土より、（81・84）はＢ－１地区ＳＤ１埋土下層より出土している。

以上限られた数の出土遺物について時期設定を行ったわけであるが、堀部分（ＳＤ１）のみについてみても、その存続期間を推定することに若干無理があることは否めない。これまでの継続調査の資料の

析を加えることによって再度検討を必要とするであろう。

3．館主について

一辺が60ｍの堀の検出によって中世城館が確認されたわけであるが、『三国地志』[17]の郡村の部分には古郡氏堡、石田四郎堡及び加納氏堡の存在が記されている。このうち古郡氏堡は現在の古郡の地に当てられ（第１図－80）、石田四郎堡は下郡地内で今回の調査地の南にある（第１図－57）。しかし加納氏堡に関しては下郡地内に「加納氏堡推定地」とあり[18]すでに消滅している（第１図－56)。

今回の調査で確認された城館跡は、この「推定地」よりも東の地に位置する。この付近は一般に「カナヤシキ」と呼ばれ、第１次調査の際出土したフイゴ羽口や鉄片などから鍛冶関係遺跡と推定されたが[19]、江戸時代末期の絵図面にこの地が「叶屋敷跡」と記されており[20]、「カノウヤシキ」が変化して「カナヤシキ」になったものと思われる。それは加納氏であり、むしろこの地が加納氏堡であると推定できる。

この城館の存続期については、堀の埋土下層からの出土遺物の年代幅が15世紀前半から16世紀前半であることから、15世紀代には築造されていたと考えられる。また堀の埋土上層に17世紀以降の遺物があることから16世紀の後半には廃絶し、徐々に埋没していったものであろう。前述の江戸時代末期の絵図面に「叶屋敷跡」と記されていたこと、また明治期にはこの地を特に「クボノタ」と呼んでいた[21]ことから考えると、江戸時代末期にはすでに堀も埋まり、堀内に溜っていた水分によって湿気の強い土地であったのか、あるいはこの時期においても完全に埋没しきらずに若干窪んでいたのかも知れない。

廃絶はおそらく織田信雄の天正９年（1581）の伊賀侵入の頃であろう。加納氏は廃絶し、残った石田氏は中世的な小領主の姿を徐々に変化させながら、伊賀藤堂藩の無足人に命ぜられることによって幕藩体制社会へ組み込まれていった。

〔註〕

① 中森英夫ほか『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会（1978）①。

② 山田猛『下郡遺跡試掘調査概報』三重県教育委員会(1979) ②。

③ 山田猛『下郡遺跡第二次試掘調査概報』三重県教育委員会（1980）③。

④ 山田猛『下郡遺跡第三・四次発掘調査概報』三重県教育委員会（1982）④。

⑤ 中森英夫ほか『下郡遺跡昭和57・58年度の発掘調査』三重県教育委員会（1984）⑤。

⑥ 山本雅靖「木津川ルートとその遺跡」（「伊賀盆地研究会会報」４，1977)。

⑦ 前掲報告書①。この部分を執筆した山本雅靖氏はのちに「伊賀における中世城館の形態とその問題」（「古代研究」27，1984）の中で、この城館の築造・経営年代を15世紀後半より、16世紀後半代と考え、廃絶は16世紀末から17世紀初頭としている。

⑧ 前掲報告書④。この中で「この結果、試掘調査（第一・第二次）では想定できなかった中世城館が推定されるに至った」としている。

⑨ 山本雅靖「伊賀における中世城館の形態とその問題」（「古代研究」27，1984)。

⑩ 伊賀における中世城館跡出土の擂鉢の分類についてはすでに試みられている。駒田利治「神ノ木館跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会（1980)。この中で駒田氏は擂鉢をＡ類からＥ類に分類し、さらにＡ類をA1からA4、Ｄ類をD1とD2に分けている。本報告書のＡ類は大概駒田Ａ類に、Ｂ類は駒田Ｂ類に、Ｃ類は駒田Ｄ類に相当する。なお本報告書Ｃ類のうち（71）は駒田Ｃ類に相当し駒田Ｅ類に相当するものは出土していない。

⑪ 辻広志「吉地大寺遺跡　第３次発掘調査」『中主町文化財調査報告書　第１集』中主町教育委員会（1983)。
兼康保明『森浜遺跡（新川舟溜り航路部分）発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1979)。
松藤和人ほか『京都府田辺町都谷中世館跡』同志社大学校地学術調査委員会（1977)。

⑫ 中川通士「下町遺跡発掘調査」『昭和58年度野洲町遺跡群発掘調査概要』（1984)。
岡田保良ほか「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告　第８集』（1985)。

⑬ 鈴木重治ほか『相国寺旧寺域内の発掘調査』成安女子短期大学校地学術調査委員会（1977)。
鈴木重治ほか『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会（1978)。

⑭ 鈴木重治ほか『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会（1978)。
大橋信弥「甲賀郡信楽町五位ノ木前期窯の採集遺物について」（「滋賀文化財だより」№94，1985)。なお、毛利光用子『布留遺跡　布留（西小路）地区出土の中世土器』埋蔵文化財天理教調査団（1985）ではこのタイプを14世紀後半としている。

⑮ 辻広志「吉地大寺遺跡　第３次発掘調査」『中主町文化財調査報告書　第１集』中主町教育委員会（1983)。

⑯ 岡田保良ほか「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告　第８集』（1985)。

⑰ 藤堂元甫『三国地志』（1763)。

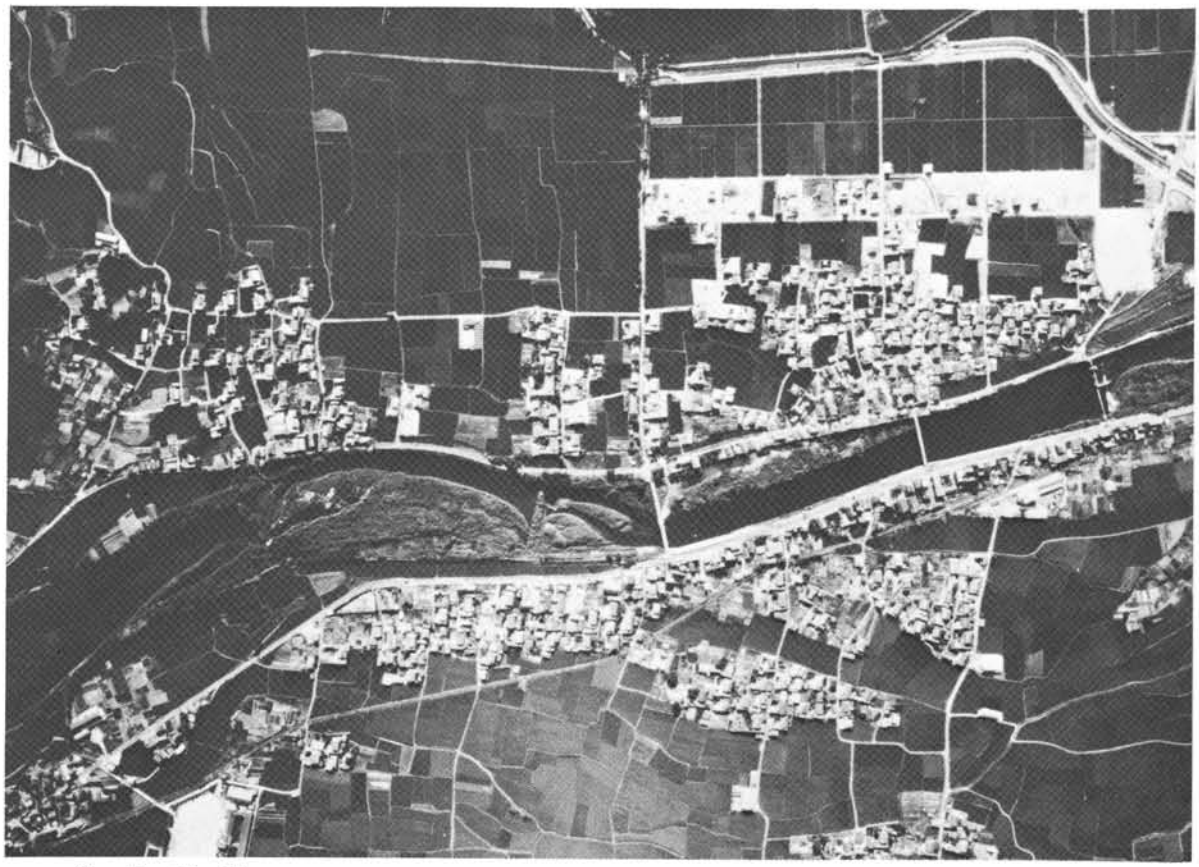
⑱ 三重県教育委員会『三重の中世城館』（1976)。

⑲ 前掲報告書②。

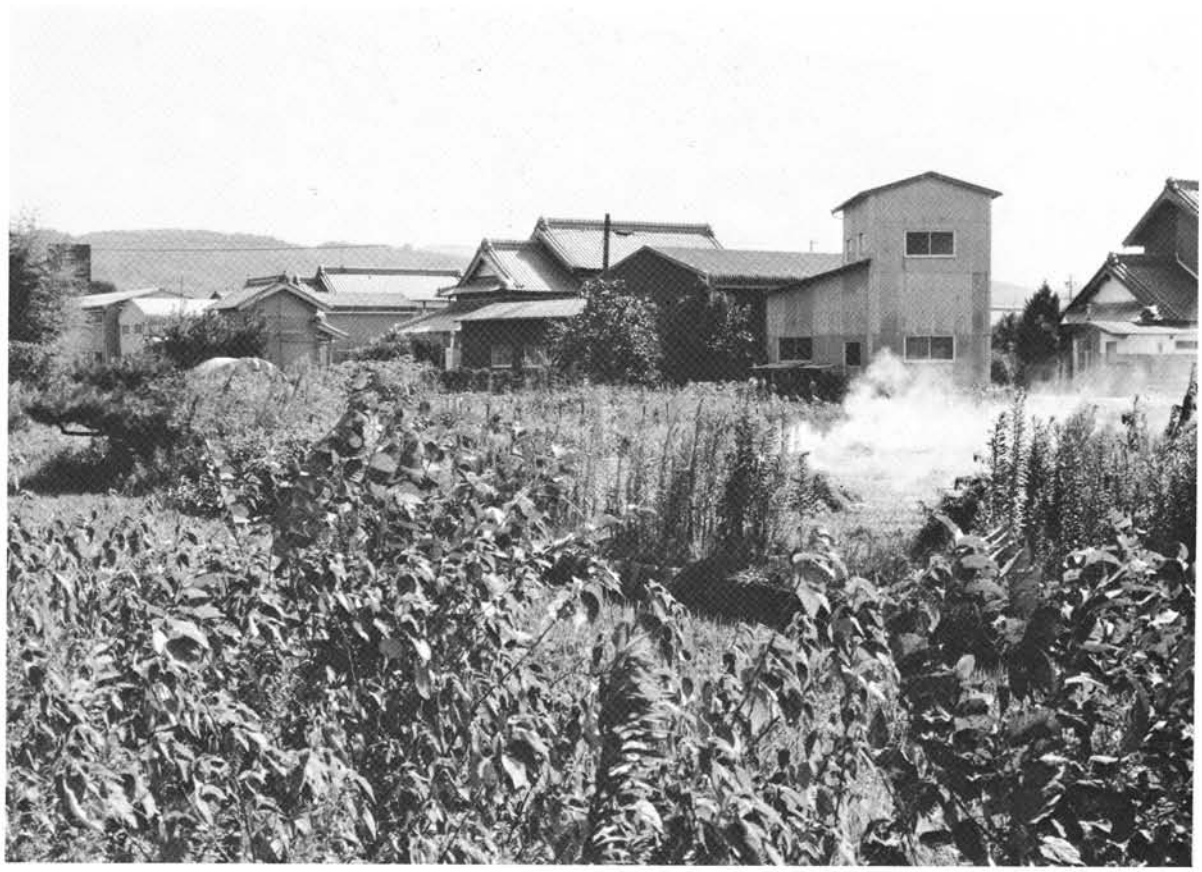
⑳ 下郡在住の藤森幸利氏の御教示による。

㉑ 註⑳に同じ。

写　真　図　版



航　空　写　真



調査前近景（北から）

調 査 風 景（西から）

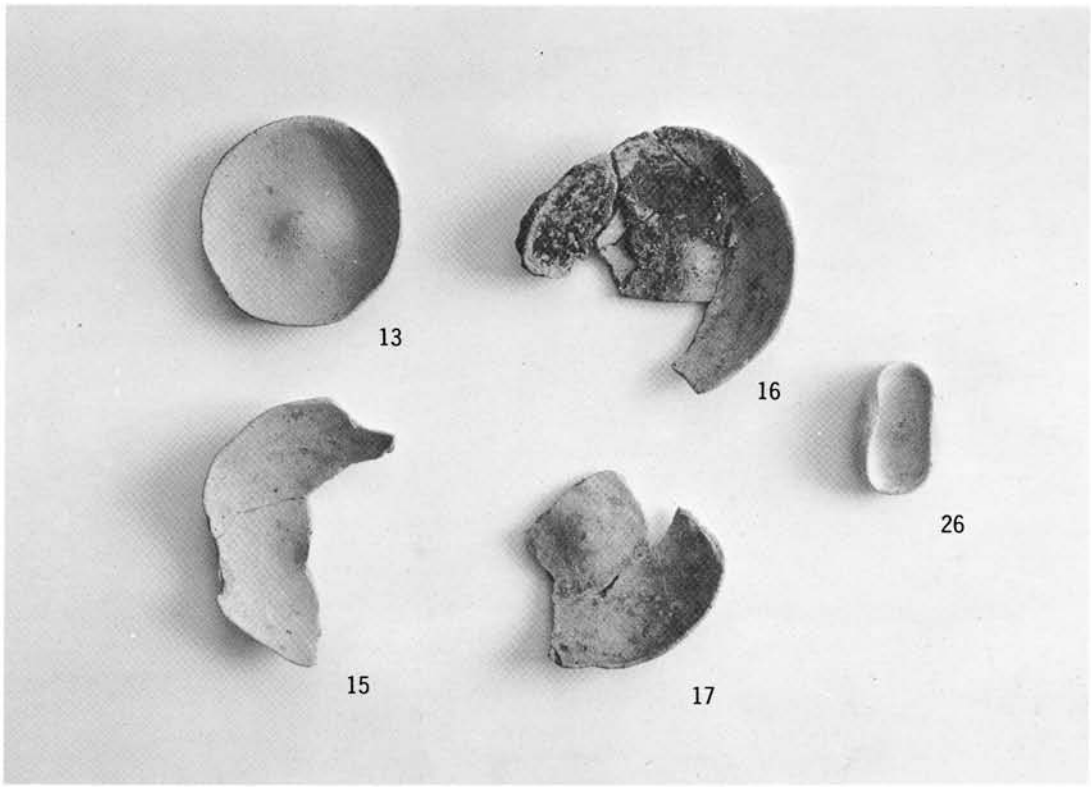
B地区近景（北から）

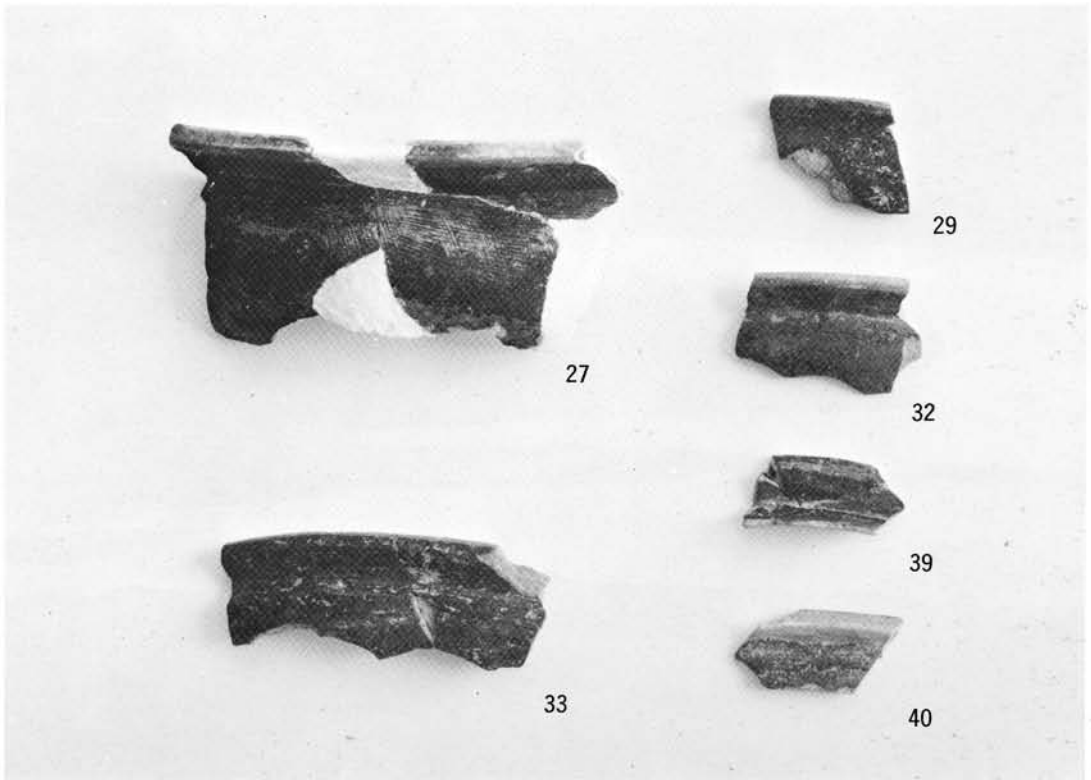
Ｂ－３地区近景（北から）

Ｓ Ｅ ５（北東から）

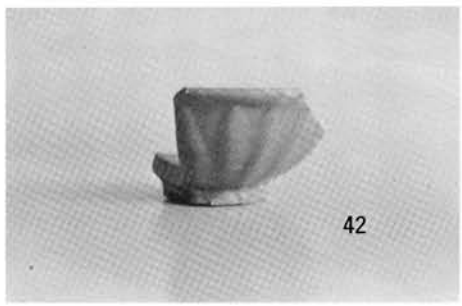
S　E　6　（東から）

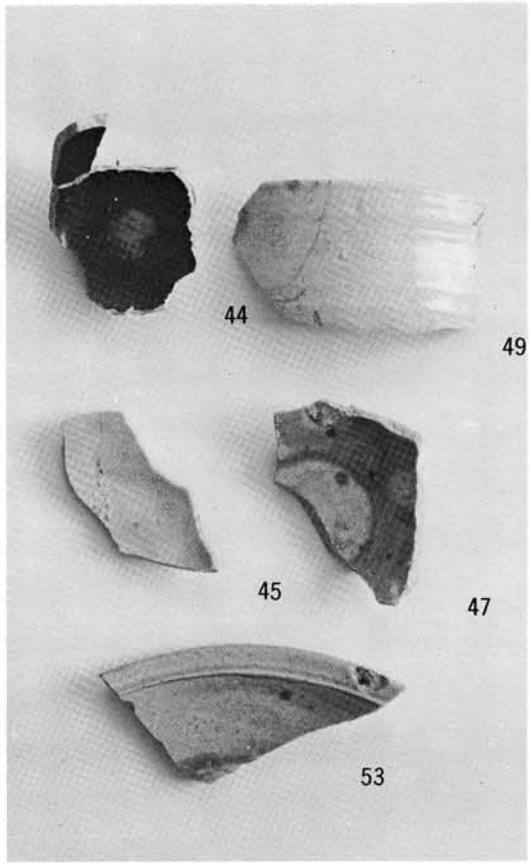
SE6 断面（南から）

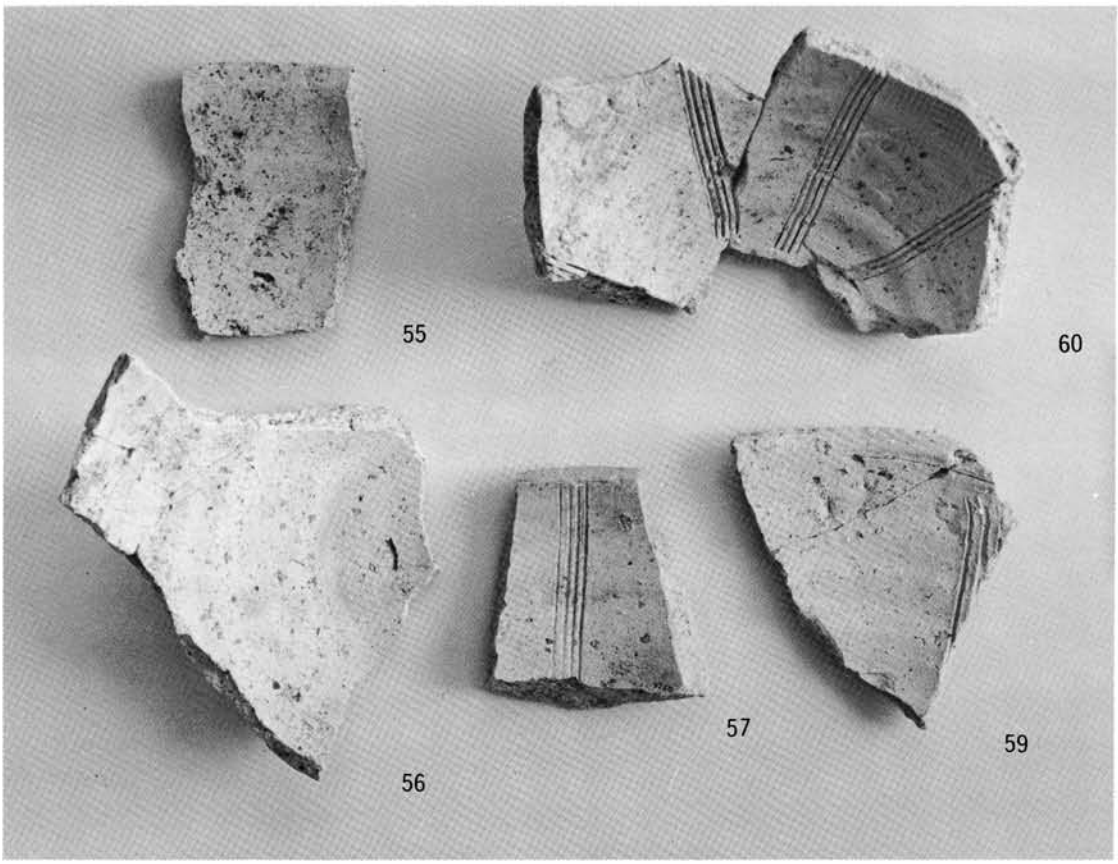




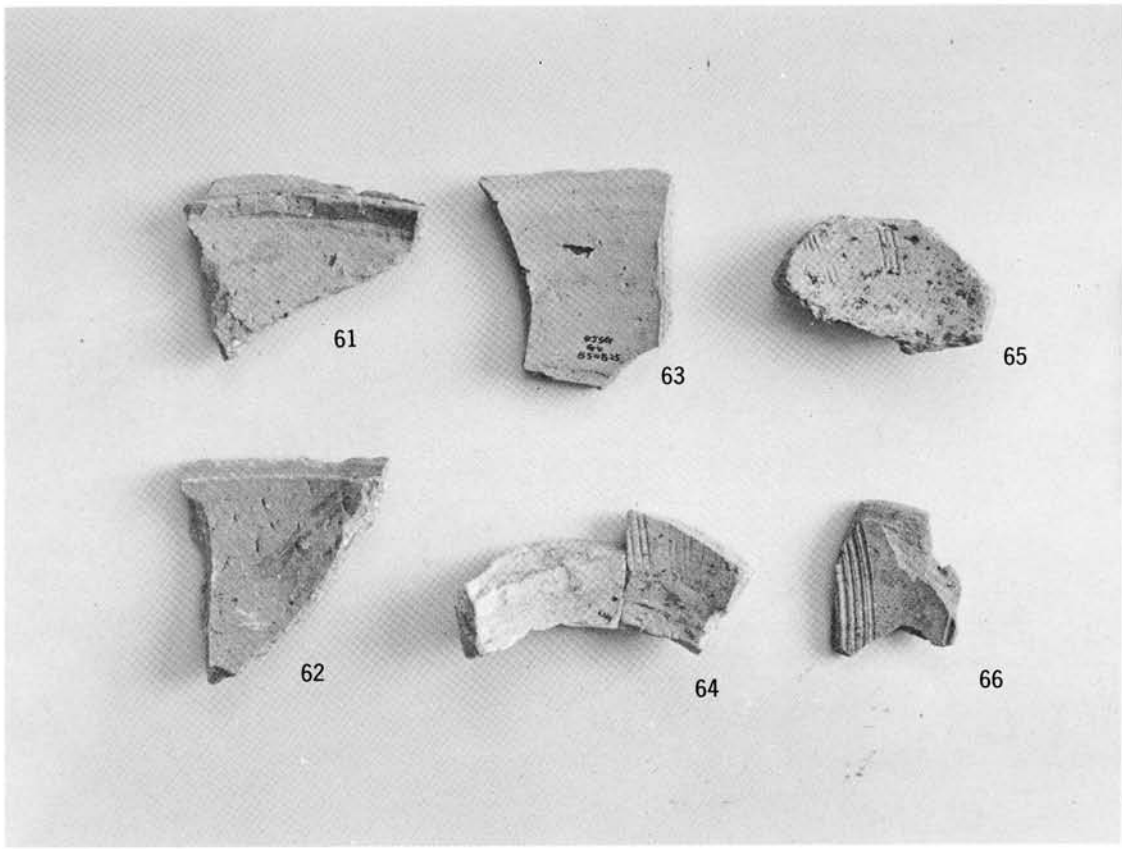
出土遺物（1：3）

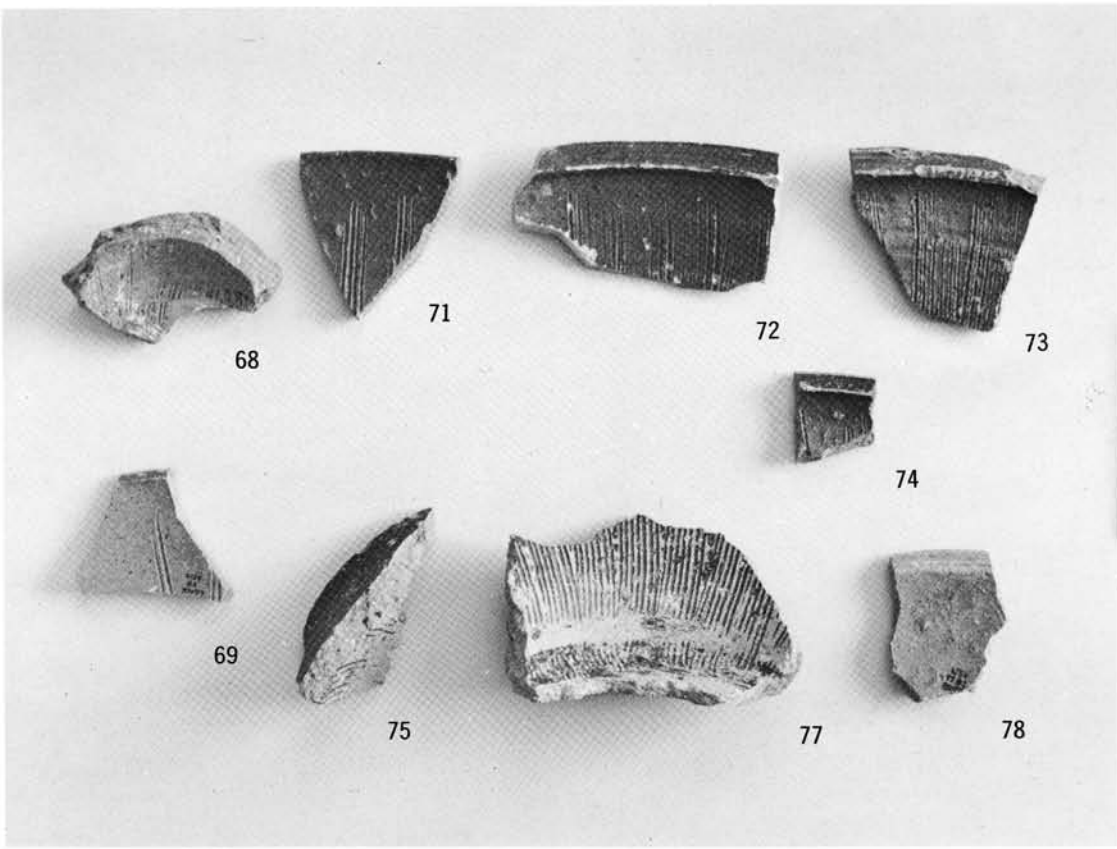




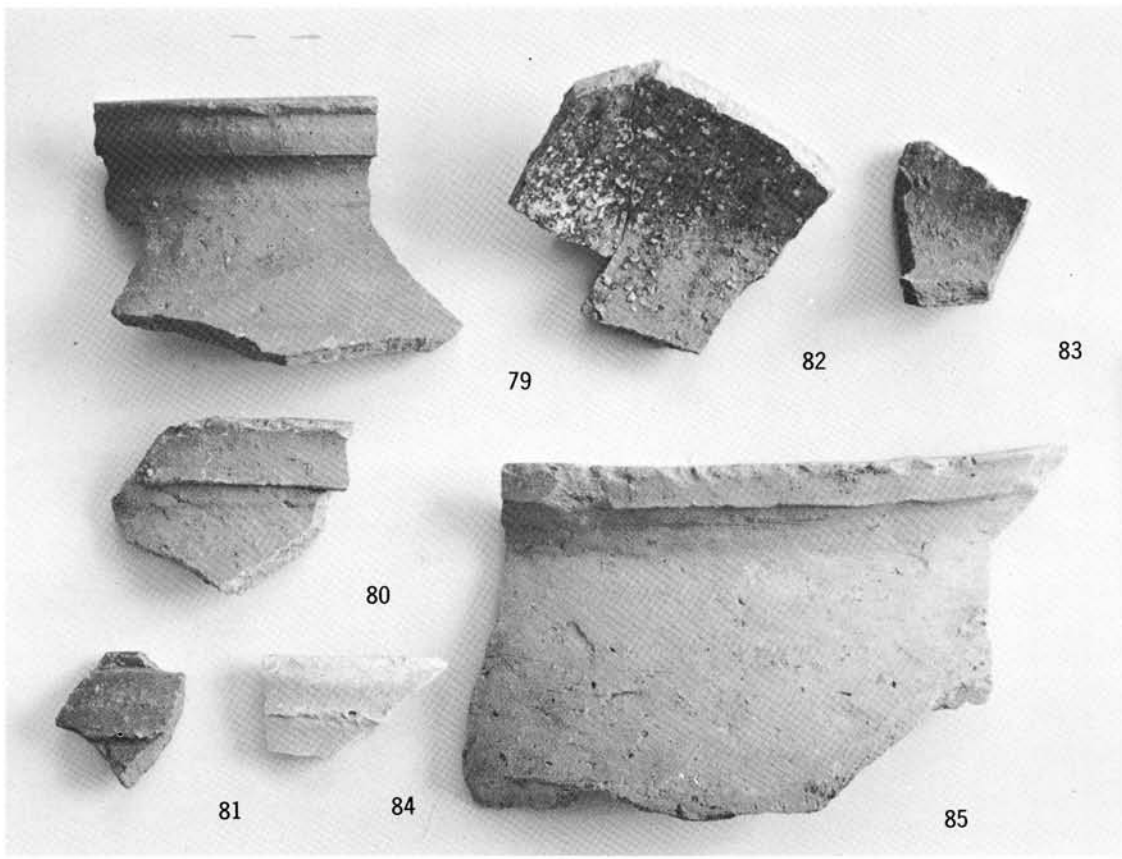


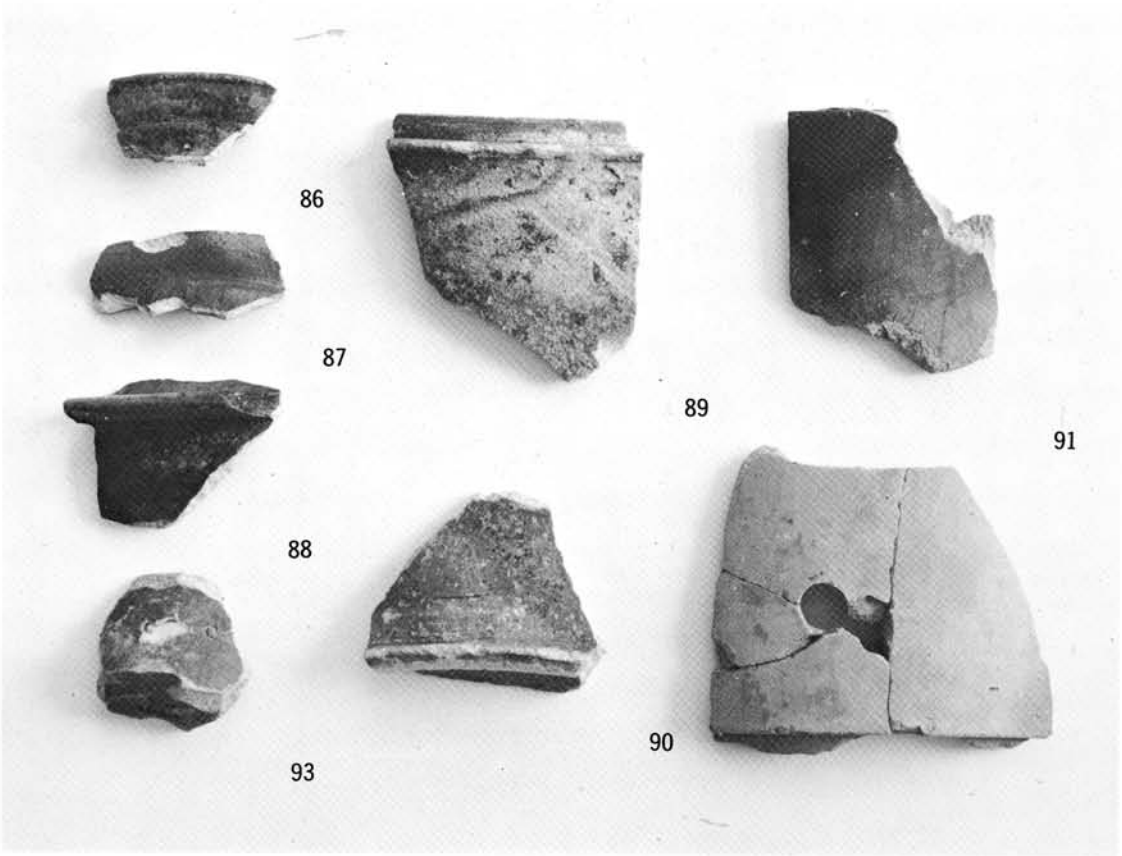
出土遺物（1：3）



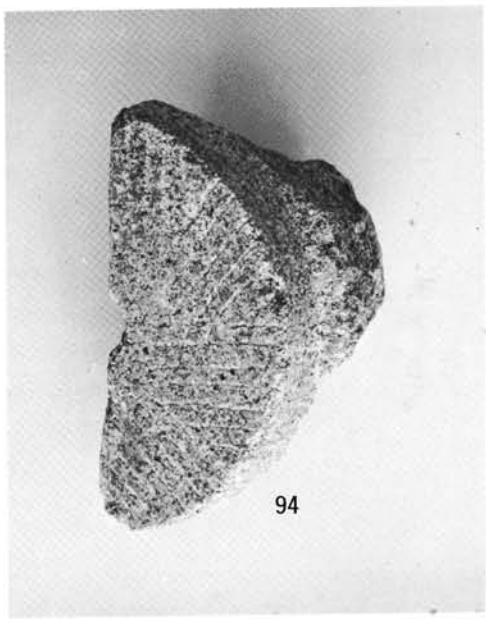


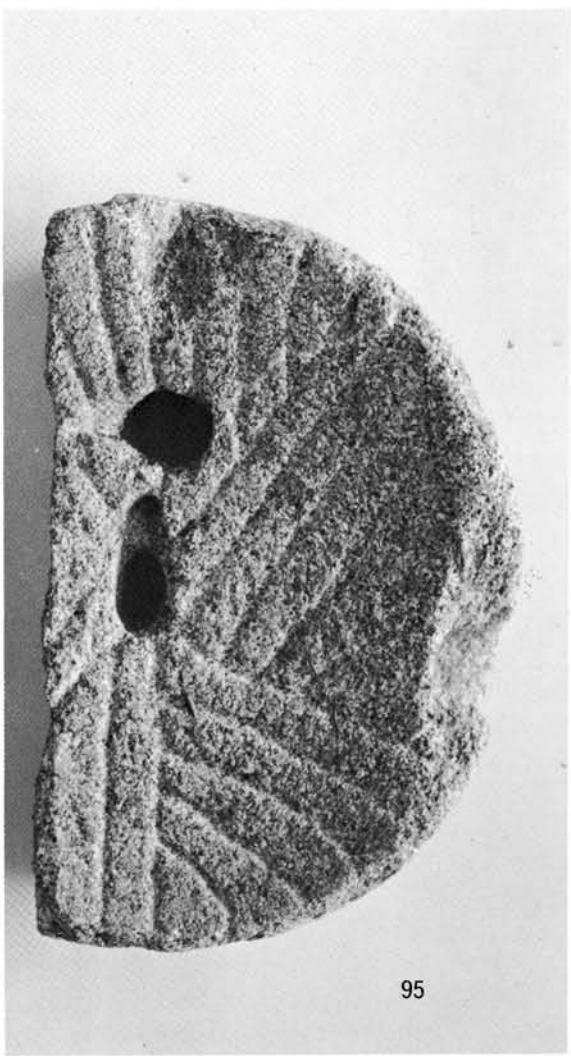
出土遺物（1：3）





出土遺物（1：3）

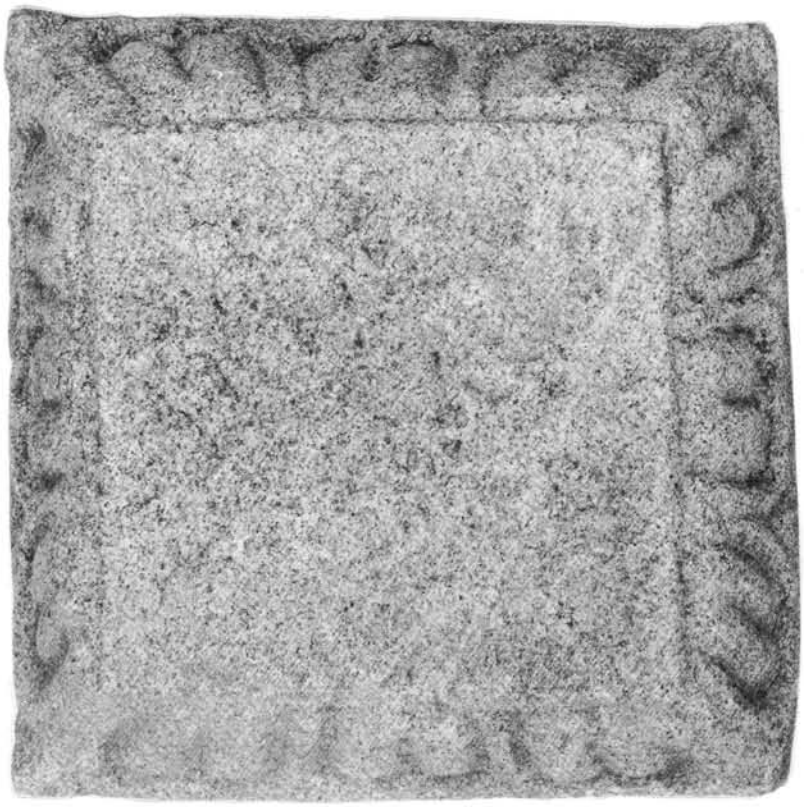




出土遺物（1：3）

96

97



103

出土遺物（1：3）

（PL10）

昭和61(1986)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 73

下郡遺跡発掘調査報告

1986年3月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　共立印刷株式会社